北辰會雜誌

第五拾壹號

第四高等學校北辰會

明治四十一年六月二十二日發行

（非賣品）

第四高等學校
4.9.15
圖書

北辰會雜誌第五拾壹號目次

論說

○東圃學兄が其著文學史講話を亡兒の記念として出版せらるゝに當りて余の感想を述ふ……西田幾多郎
○百尺竿頭……登茂三郎

雜錄

○讀書雜話……浦井生

文苑

○置みやげ……雨森一烏
○文覺獨白……とし や
○響……たけを
○紅薔薇……青花
○われらが歌……和歌會
○四高俳句會吟草……
○十四番句合……紫影先生判
○桐の花……秋雨

雜報

○南下軍……
○寒潮事件……
○牛頭馬頭……雨森一烏

附錄

○經驗と思惟及意思……教授 西田幾多郎

北辰會雜誌第五拾壹號

論說

東圃學兄が其著國文學史講話を亡兒の記念として出版せらるゝに當りて余の感想を述ふ

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸鄉せられた時、君には光子といふ女の子があつた。愛らしい生々とした子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此子を失はれたので、余は前年旅順に於て戰死せる弟のことなど思ひ浮べて、力を盡して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになりたる己が次女を死なせて、反つて君より慰めらるゝ身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を見たことのない余が、思ひがけなくも或用事の爲めに、東京に出るやうになつた、着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代の親友である。殊に今度は同じ悲を抱きながら、久し振りにて相見たのである、單にいつもの舊友に逢ふといふ心得のみではなかつた。然るに手紙にては互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向うては何の語も出

四高圖書

ず唯輕く弔辭を交換したまでゝあつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探りて一束の草稿を持ち來りて、亡兒の終焉記なればとて余に示された、かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書き添へてくれよといふことをも話された。君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難き悲哀を更に思ひ起して苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものではない、言語に表はし得べきものは凡て淺薄である、虛僞である、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はむしろ涙にも現はすことのできない深き同情の流れが心の底から底へと通つて居たのである。

余も我子を亡くした時に深き悲哀の念に堪へなかつた、特に此悲が年と共に消ゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死にし子の面影を書き殘した、而して直に之を東圃君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思ふたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別に臨んで君の送られたその兒の終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに、取り出して詳かに讀んだ、讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じきものかとつく〳〵感じた。誰か人心に定法なしといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路をたどる如くに、余の心は君の心の如くに動いたのである。

回顧すれば余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた余の姉を失ふたことがある、余は其時生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到りて思ふ儘に泣いた、稚心に若し余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思ふたことを今も記憶して居る。近くは三十七年の夏、悲慘なる旅順の戰に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得ざりし有樣。こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思未だ全く消ゆる失せないのに、又己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は格別である。余は此度生來未だ曾て知らなかつた、沈痛なる經驗を得たのである、余は此心より推して一々君の心を讀むことができると思ふ。君の亡くされたるは、君の初子であつた、初子は親の愛を專にするのが世の常である、特に幼き女の子は、たまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかなる君にして、此子を失はれた時の感情はいかゞであつたであらう。亡き我兒の可愛いといふのは、何の理由もない、唯わけもなく可愛いのである、甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。これまでにして、亡くしたのは惜しからうといつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない、女の子でよかつたとか、外に子供もあるからなどいつて慰めてくれる人もある、併しかういふことで、慰められやうもない。ドストエフスキーが、愛兒を失つた時、又子供ができるだらうといつて、慰めた人があつた、氏は之に答へて、How can I love another child? What I want is Sonia.といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である、其間一毫も利害得失の念を挾む餘地はない、唯亡兒

の俤を想ひ出づるにつれて、無限に懷かしく可愛さうで、どうにかして、生きて居てくれゝばよかつたと、思ふのみである、若きも、老いたるも、死ぬるは人生の常である。死んだのは我子ばかりでない、と思へば理に於ては少しも悲むべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよといふ、併しこれが親に取つては堪へ難き苦痛である。時は凡ての傷を癒やすといふのは自然の惠であつて、一方より見れば大切なることかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい、せめて我一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔君と机を並べてアービングのスケチブッグを讀んだ時、他の心の疵や、苦みは之れを忘れ、之れを治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は人目をさけても之れを溫め、之れを抱かんことを欲すといふやうな語があつた、今まことに此語が思ひ合されるのである。折にふれ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である、死者に對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子顏よかりき、をんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である、冷靜に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。併し余は今度この人間の愚痴といふもの丶中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其物（End in itself）である。いかに貴重なる物でもそは唯人間の手段として貢いたのである、世の中に人間ほど尙い者はない、物は之れを償ふことが出來るが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことはできぬ。而してこの人間の絕對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜらる丶のである。ゲーテが其の子を失つた時 Over the dead といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なるものがあつたでもあらう。併し人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も究竟の目的は人情の爲めにするのである。而して人情といへば、たとへ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なる者はなからう。徒らに高く搆へて人情自然の美を忘る丶者は反つて其性情の卑しきを示すに過ぎない。金州城外馬不前の一句ありて愈々乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我子の果敢なき死といふことに由りて、多大の敎訓を得た、名利を思ふて煩悶絕間なき心の上に一杓の冷水を浴せかけられた樣な心持がして一種の涼味を感ずると共に、心の奥より秋の日の樣な淡く溫き光が照して、凡ての人の上に純潔なる愛を感ずることができた。特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此處には深き意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である、死の事實の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て始めて眞に生の意義を悟ることが出

來る。

物窮すれば轉ず、親が子の死を悲むといふ如きやる瀬なき悲哀悔恨は、たのづから人心を轉じて、何等かの慰安を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀れ果敢なき一生を送つた我子の身の上を思へば、いかにも斷腸の思がする。併し飜つて考へて見ると、子の死を悲む余も遠からず同じ運命に服從せねばならぬ。悲むものも悲まれるものも同じ青山の土塊と化して、唯松風蟲鳴のあるあり、いづれを先、いづれを後とも見分け難いのが人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば、何だか滑稽にも見える、生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も殘さず、死んだとて悲んでくれる人だにないと思へば哀れといへばまことに哀である。併しいかなる英雄も赤子も死に對しては何等の意味も有たない、神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニャの作といひ傳へて居る畫に、死の神が老若男女、あらゆる種類の人を捕へ來りて、帝王も乞食もみな一堆の上に積み重ねて居るのがある、榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない、又世の中の幸福といふ點より見ても、生きのびたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか、生きて居たらば幸であつたらうといふのは親の欲望である、運命の秘密は我々には分らない。特に高潔なる精神的要求より離れて、單に幸福といふ事から考へて見たなら、凡て人生はさほど慕ふべきものかどうかも疑問である。一方より見れば、生れて何等の人世の罪惡にも汚れず、何等の人世の悲哀をも知らず、唯日々嬉戲して、最後に父母の膝を枕として死んでいつたと思へば、非常に美しい感じがする。花束を散らした樣な詩的一生であつたとも思はれる。たとへとへ多くの人に記せられ、惜まれずとも懷かしかつた親が心に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき死をも慰め得て餘あるとも思ふ。

最後に、いかなる人も我子の死といふ如きことに對しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつたなど思ふて返らぬ事ながら徒らなる後悔の念に心を惱ますのである。併し何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、內からも働く、我々過失の背後には不可思議な力が支配してをる樣である、後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、深く自己の無力なるを知り、己を棄てゝ絕大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救ひ、又死者に佗びることができる。歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することができる。

百尺竿頭

登　茂三郎

博大なる理想の焰と熱烈なる信念の火なき青年は冷にして力なし、その眼に光なくその頰に紅の血汐滴らず、然り人若し偉大なる事業をなし崇高なる人格を鍛造せんとせば先づ北方高く燦と

して輝き以て衆星を率ゆる理想の北辰星を胸に齋き祭らざる可らず、

只北辰星の爛としてその光芒を放つあり茲に於て衆生の適歸する所を知り銀河の横流すべき所を知る、唯胸に一大理想あり造次にも顚沛にもその一擧手一投足に無限の意味あり無量の價値あり百川の大海に注ぐが如く千言萬行凡てその理想に攝取されて贅事なし。

未來の進歩も理想の導くあり事物の根柢には理想の横はるあり、理想なき所に生命あらず吾人を此世に生み出せるその力は又吾人を推進して高く登らしめんとす人生それ自らより更に善なるものを作り出さるべく人生はその結果に向ひて徐に進みつゝあるなり、人生の歴史は屈伏し難き理想の記錄なり、然り而して宇宙と共に滅せざる歴史を作らんとせば須くその理想をして宇宙の理想と一致せしめよ。

かくて人々天與の大業に志して日新日進無限向上の大道を攀ぢ進まんかその樂盡くるなし譬へば山に登る如き歟登る事一歩又一歩景開くこと萬里又萬里その歩々の中に無量の妙味存す。

茲に始めてその生活に空虛なくその精神に疲倦なし心實にして物欲入らず以て富貴も淫する能はず威武屈する能はず行止我にありて一毫も他人の提掇を受けず鳶飛んで天に戻り魚淵に躍る的天地の階調にその心を感觸せしむるを得庶はくは大丈夫と謂うに幾かん乎。

誰れか宇宙を目して盲動と云ふ循環と謂ふそこに進化あり向上あり理想あり統一あり、意志なき所げに循環はあらん遂に進化は見出し得ざるなり、理想なき所盲動はあらん遂に向上は見出し得ざるなり、見よ一穂の青燈は能く宇宙六合を照らす太陽と相並んで等しく光學の原則に適應するを之れ宇宙整一の美にあらずや、見よ雲を腰にして巍々乎と天に冲するヒマラヤ山はバルチック艦隊をうねり飛ばせし印度洋の深藍と印度なる大手によりて相握手せるを、花の如き平氏は壇の浦曲にかき失せて團子の如き源氏の之に次げるを、一去一來その規を越わず一点一劃その分を過たず一絲亂れず一毛犯さずそこに調和美の存するを知らずや。

試に想へ命蹙りて一花片空しく風なきに枝頭を辭せしを、今迄太平の夢を貪り居りし空氣は花片墜落の道を開くべく爲に空氣に動搖を來たし塵舞ひ埃は飛ばん而してその中に鑛粉の交れるあり、そが恰かもその樹下逍遙せしクレオパトラの眼玉に入りて少しく之が魔力を減せしと假定せよ、シーザーは如何、ブルタスは如何、將た又世史歴史は能く今日と異ならざるを得るか、萬物相聯り相交り一も捨つるを得ず、一も挑するを得ず是れ宇宙の統一美に非ずや。

人類相集りて社會を造る、社會の文明に進化あり個人の人格に向上あり愛の帝國はその範圍を刻々擴めつゝあり、月は草花上に結べる露にその影を宿すにあらずや、宇宙の影は社會に宿れり、宇宙の精神は人類に反映せり、そは地平線上は紫色黄色に天を色どる雲によりて太陽の如何なるものかを容易く判知し得らるゝか如し、果然宇宙は愛の流行なり愛の進化なり。

太陽の光は白シャツを通るに足るも筋肉を透るに足らず、エッキス光線は筋肉を透るに足るも遂に骨髄を享るに足らず、然れども愛の光は以て骨髄を享し心臓にその血を湧かしめ萬世の英雄をして小兒の飴玉を與へたるが如く猫に鰹節を嘗めしむる如く自由にその野心を變轉せしむるに足る、宇宙の大愛に至りては物として透らざるなく事として動かざるなし、之を神の愛と云ふも可

也、佛陀の大慈悲と名づくも可なり。

既に愛は宇宙の一切を暖め和らげ動かす大神秘力を有す、その形なきを以てその實在を否む可らず。

汝光を享けんとせば何ぞ自ら進んで太陽に面せざる、汝宇宙の大愛を感得せんとせば何ぞ自ら進んでその流れに投ぜざる、光を見ざる者に向つては千の波動說も以て光の如何なるものなるかを知らしむる能はず、流に投ぜざる者には以てその流の速さと方向とを感知せしむる能はず、嗚呼誰か自ら經驗せずして徒らにそを呶々せんとする。

詩伯テニソン歌うて曰く、

「信仰は禍の中に閃めく福を見、西に傾く日輪を見て唯一夜かゝれば復た昇るを知り冬の芽を通して夏の豫想し花の落つる前に果を味ひ歌はざる卵の中に雲雀の聲を聞く」と、

然り智は物に待つあり、情は感覺に依るあり、意は事に從ふあり、啻夫れ信仰のみ絕對なり、外に待つなきなり無差別なり、小兒も學者と共に分有すべく貧者も富者と共に用ひて相干さず。そは愛の倉庫を開くべき鍵にして力を得べき唯一つの道なり。

吾人の生活は宇宙の生活なり、吾人の肉躰を組織する細胞は宇宙の分子なり原子なり吾人の生活はその根抵を須く宇宙に置かざる可らずその信仰の火を宇宙の靈火より齎らさゞる可らず、個中の趣を會得せば五湖の煙月盡く寸裡に入り眼前の機を破り得ば千古の英雄盡く掌握に歸す、その根本の秘鑰を破し得ば枝葉滔々たるもの自ら解し得ん、然り自ら解し得ん。

吾人は先づ自ら問ふべし何の爲に登校するか、何の爲に紳士となるか、何の爲めに三百代言となり將た土木課長となるか、何故に法律を守り國家に服從せざる可らざるか、何故に人道の爲に戰ひ正義を口にせざる可らざるかと、人は銀行の月給にありつく所謂實業家を目して獨立心ありと云ひ腰辨以て五斗米に屈するを獨立心なしと云ふ、人は心の欲する所を追ふて否本能煩腦の犬に追はれて慾道を彷徨するを自由と云ふ、汝の何者たるかを知りて自覺の上に立つて行ふその腰辨と豆腐屋とを問はず等しく獨立にあらざるか、獨立とは思想に就て謂ふなり、汝の本性に從ひ宇宙の大法を信じて進む、是れ眞箇の自由にあらざるか、放飲飽食その本能の追ふを制御する事なくして快を一時に取り夜半の腹痛に晝間の愚行を悔ゆるが如きは果して自由と稱するを得べきか、竹風氏によりてニイチエ主義鼓吹され、樗牛氏によりて美的生活稱へられてよりその名を聞いて青年の大部分は醉ひたり、他人の醉へる囈語の氣息を吸うて醉ふに至りては自個の自覺獨立自由何處にかある。

孔夫子は「七十而從心所欲不踰矩」と宣言せり之れ彼が彼の所謂「天」の理と一致し天の意に從へるに非るか、彼はその心靈に天地の大道を宿らしめたるなり、孔子も吾人と等しき靈性を有する人に非ずや、これ實に人類の至るべき美的道德生活にあらずや、出づる息入る息天地の理を含み宇宙の氣に充つ、至大至剛とは是之を云ふべきか、西曆紀元前五世紀なる孔子は七十にして眞美的生活に入れり、廿世紀の吾人は宜しく卅歲にして玆に至るべきなり。

現代に病むべきは凡ての人第二義に立てるにあり、桶中の水にその一生を托して跳ね狂ふ虫的

樂天觀に安んぜるにあり、桶若し覆らば萬事休す、乞ふ吾人をして先づ原始人民の天地に對せるが如く赤裸々に天地に立たしめよ、吾人よりして一切の傳說と習慣と形式と制度とを脫せしめよ、博士樗牛と共に現代を超越せしめよ、而して現代に復れ、之を聞く、百尺竿頭一步を進めよとは竿頭より來し竿を振り顧みるにありと、げに然らん、若し竿頭に登りし上に一步を進めば地上に落つるより他なければなり、吾人をして乞ふ一步を進ましめよ、

考へよ、自覺せよ、而して地上に汝が痕跡を印せよ。

今や七十有五日の休暇は來らんとす、短しと云へば一年も短し、十年も——百年も——千年も——兼好法師悟つて曰く「飽かずをしとおもはゞ千年も一夜の夢の心地こそせめ」と、人生は永劫と永劫の中に挾まるディレンマなればなり、七十五日以て百部の書を讀み、數百の人と交はり、自然の殿堂の宇宙の秘義を感得するに足る。吾人は豚となりて安心せんより人となりて懷疑の淵にその步を停めん、然り是實に人類の光榮に非ずや。

實言、雖藜羹之陋、足以動物、
虛言、雖能辯之士、不足感人、

——佐藤坦——

雜錄

讀書雜話

浦井生

ベコンスフィールド卿の英斷

エジプトの副王イスマイル、パシア（Ismail Pasha）は近世エジプト史に於ける一偉人なり幼より巴里に於て教育を受け一七六三年叔父サイドパアの殂落するや其後を承けてエジプトの太守に任ぜられ同じき六十七年巧に土耳古朝廷に對して運動したる結果始めてエジプト副王（Khedive）の稱を許されたりき一八七二年以來極力南方の經營を始め次第に領土を擴めて赤道直下スーダン地方に至り同時にアレキサンドリアの築港を行ひ溝渠を通じ木綿の栽植等を創むる等鋭意エジプトの發展に盡瘁せりされど惜む可し辣腕ありて智慮足らず過度に事業を計畫せしため國力之を支持すること能はずエジプト財政の窮逼甚だしく大破綻を生ぜむとするに至りしかば副王は止むことを得ず其所有するスエズ運河株券を賣却せんとせり蓋しスエズ運河は佛人レセップの設計に依りスエズ運河株式會社の經營に係り一八五六年工を起し同じき六十九年成る當時のエジプト太守サイドパシア奮うて大株主となり總株數四十萬の內十七萬七千株を所有す因て地中海に於ける運河の入口を特に名けてポートサイドといふなり而してエジプト政府は一八四〇年メヘメットアリと土

耳古との交渉事件に方り佛のチエール内閣がエジプトを援けし以來英を疎んじ佛に倚らんとする傾向ありて秘密に之を佛人に賣らんとすパリの銀行家はシンヂケートを作りて之を買收せんことを欲し、かども彼等は細意小膽政府より何等かの精神的援助（モーラルサッポート）を得たる後に於てせんとし政府と交渉に及びしに佛國政府も亦た意氣地なく保證を與ふることを憚かりしにや或は事件の關する所重大なるを睹るの明なかりしにや之に久うして何等の回答を與へず買收談行惱の姿となれりかくして時日を經過しつゝありし際倫動なるオッペンヘイム氏（Mr. Oppenheim）の在巴里通信員は終に此秘密を嗅ぎ出して之をオッペンヘイム氏に報ぜり氏は直に之を主相ベコンスフィールド卿に告げ且つ曰く此株券の買收には約四百萬ポンドを要せん而して市場に於て此資金の調達を得んとすれば忽ち佛國資本家の疑を招き彼等は立どころに買收を決行するの虞あり今日の場合一刻も猶豫すべからず即座に買收を爲すを要すたゞロスチャイルヅ一家のみ此資金を調達し得るならんとベコンスフィールド卿は之を聞くや蹶起して直にロスチャイルド商會を訪問して社長に面會し之に語りて曰く予はある事件の爲め即座に四百萬ポンドの資金を要すされど予は何等の擔保をも提供すること能はず議會召集の上直に償却法案を提出せん考なり議會が予の案に協賛を與へなば即ち可若し然らざる時にはと言未だ終らざるにロスチャイルド氏遮りて曰く可なり可なり予は快諾すと於是卿は直に在カイロ府英國領事に電命して副王に謁し買收を申込ましむ是時に至る迄英國領事は毫も此事件を知らず意外の命令を受領して驚愕せしといふされば在カイロ佛國領事は會ま玉突戯に餘念なかりしに此報を得て英人の爲め出し抜かれたることを無念がりて撞毬棒を打ち折りぢだんだ踏みて當局者の腑甲斐無きことを罵りきとぞ一八七六年二月議會の開かるゝやベコンスフィールドは之を報告し政府は充分の責任を以て之を決行せることを語り買收費消却法案を協賛せんことを請へり議會も始めて之を聞知して大に驚きしかど異議無く之を通過し英國はスエズ運河の主權を掌握するに至れり抑も此運河は佛人の計畫に係り主として佛國の資本を以て成れる者なるに前述の聊かの機勢より英國の勢力圏の者となりし也さればベコンスフィールド卿の功は卿の伯林會議に於ける樽俎折衝に讓らずといはざる可らず（ドグルウィユ、近世埃及）

英人の迷信

英國に行はるゝ迷信の内には英國に限らるゝにあらずして歐洲一般に行はるゝ者多きは勿論なり例へば十三の數を忌む如き是なり普通には此風を以てキリストと十二使徒との最後の晩餐より出づとなせども此風は早くキリスト教傳來に先ちて古來ゲルマニ人の中に行はれたること明にしてノース神話より出でたり即ちウァルハラの宴に於て主客十二人なりしにロキ入り來りて十三人となりしに會まバルヅルの殺害を見るに至りしかば十三といふ數を忌むこと始まりしに恰もキリストの事蹟と暗合しければ愈よ以て十三の數を忌むに至りしと見ゆ殊に此風の甚しきは巴里にしてパリの各町には十三番地無く富籤の番號にも十三無く又客を招く時には不時の來客或は不參者を生じて十三人となることを防がんが爲め豫めカトルジャン又（Fourteener）といふ者を設け置き偶然十三人となる時は急に此人に入來を請ふといふ其他毎月十三日を忌み殊に其日が金曜日に當る時は一層甚だし一週の内にては金曜日を忌む又是も英國に限らず南獨逸にも盛なることなるが出

生して間も無き嬰兒の体重を量り身長を測るを忌む立て懸けある梯子の下を跨るは大禁物にして其人は後日刑場の露と消ゆべし金曜日に爪を鋏まば大なる災難に遭ふ可く土曜日に居所を移せば永く落ち付くこと能はず (Saturday flit, Never long sit) 食卓なる鹽を飜す時或は誤て鏡を破毀する時は七年の悲哀あらん (Seven years' Sorrow) 蝙蝠が窓より飛び込みたり何鳥にても嘴を以て窓戸を啄くとき (Pecking at the window) は共に大不幸の兆にして多分は死を免れず日曜日に臥床を裏返へすことは愼まざるべからず蠟燭の涎が下に流れずして横に食み出す時は死の接近を示し蛛蜘類が壁間に於てカチ〳〵音をさせる時 (Ticking spider) も亦然り之を death watch といひて最も厭ふなり婚約の指環に蛋白石ある時 (an opal in an eng agement ring) は不吉なり又婚約の指環に嵌入しある寶石の脱出する時も同じ時季に關する迷信を擧ぐれば五月に結婚すべからずといふ (Mar ried in May, Rue the day) 又五月にはブラシ箒類を買ふべからず家内に病人絶えずとなり (Bringing broom in May, Sickens night and day) 結婚の時季につきても多くの迷信あり例へば誕生日に結婚するを忌む此風も亦た英國に限るにあらずしてイスパニアにも行はれアンフォンソ十二世は一八七九年十一月廿八日を以て成婚式擧行の告示ありたる後急に之を廿九日に延ばし給へり是れ陛下は一八五七年十一月廿八日の降誕なりしため宮中に異論生じたるためなりと信ぜらる結婚式用の菓子 (Wedding Cake) に關しても迷信多し未婚の女此菓子を枕の下に置きて眠れば未來の夫を夢むべしといふ類なり未婚の男女階段を踏み外して墜落する時は久からずして良緣を得べき兆として之を視す妻の齡夫より多きときは一生涯パンには困ることなし (If the woman Wear the oldest lead, The man will neveswant bread) クリスマスのプッヂングを製する時婚約の指環を入れ置けば此指環の入りたる一片を得たる小女は遲くも翌年中には結婚すべし之に反して晩禱のチーの時パン皿の最後の一片を得たる小女は當分結婚の見込なし (get on the shelf) 小女は青及白色の衣を着て結婚の式に臨むべからず緣遠となる虞あり (Green an whitde, Forsaken quite) 商店に於て蹄鐵を以て千客萬來の呪をなすことは一般に行はるゝ風にして蹄鐵の向け方置き方に種々の法あり中央部諸洲に於ては窓より新月を見又は之を左肩に見るは凶なれども戸外に於てし又は右肩の上に見れば吉なりとす同地方に於ては十月三十一日の AllSaints 祭の深夜若き女が鏡を取りて之を見詰むる時は未來の夫の姿を看るを得といへり此等の迷信を盡く蒐集しスコットランドアイルランドに及さば一部の大冊を爲すに至らん (ナウベルト英國の土地及人民)

一八七〇年戰役後獨佛國防方針の差異

一八七〇年戰役の後獨佛兩國は其國防法に焦慮し愼重なる攻究の後兩國が決行したる一般方略が全然相背馳せるこそ面白けれ今兩國の國境を視れば其延長約二百哩にして其四分の一だけはフォーゲーセン山脈に沿ひ所々に於て横斷する通路あれども地勢上判然たる境界を爲し殘り四分の三は平地にして山河の自然の墻塀を作る者なく全く人爲的の境界線あるのみ

佛國は全國境に沿ひ(詳にいへば國境より少しく下がりて)連砦を築きて相呼應し一朝敵軍來らば重砲の十字火に懸けて之を全滅せんとす何となれば獨軍が佛國に進入せんとせば正面攻擊を行ふ他の策無ければなり蓋し獨軍が白耳義若くは瑞西より迂回すれば佛國に對し側面攻擊を行ひ得べ

きも此兩國は永久局外中立地なれば獨國がさる無謀の擧に出でざるべければなりかく獨軍が正面攻擊に來る時は現時の進步せる大砲の火力は容易に敵を擊退すべく如何なる軍隊と雖も此陣地を犯すこと能はずとは佛人の確信する所なりされど此方略の免れ能はざる弱点は防禦線極めて長く敵の攻擊が何れの邊に墜下し來たるや知る能はざるを以て全線に兵員を分配せざるべからず隨うて局部の防禦力最も薄弱を來すに反し敵は隨意の点に主力を以て攻擊を加へ得るにありかくして若し獨軍が防禦線の一所を破らば大軍を其地より進擊せしめ得べく佛人が之を禦ぐには第二線に於て充分の兵力を蓄へ置くを要すされども佛國とても無限の兵を有せざればさほどまで兵力の餘剩あるを得ず故に佛國が此防禦法を採用したる際批評家の多數は之を拙策と爲し若し獨軍は多大の損害を辭せざる決心を以て攻勢を取るときは第一戰に於て佛の防禦線を突破し得べく將來假りに獨佛の交戰ありとすれば獨軍は星馳殺到して此快擧を試みるならんといへり然るに其後兵器の改良著しく砲の着彈距離及び發射速力は驚くべき進步を來し爲めに要塞攻擊軍は極めて不利益の位置に立つに至りしことは南阿戰役日露戰役の實驗に因りて明瞭なれば今日に至りて見れば佛國の取れる方略却て當を得たるかも知るべからず遽に可否を決し難き狀態となれり

獨人が採用せる國防法は全然佛國の反對なり獨逸は國境に近くメッツ及びストラスブルヒの二の要害を有すメッツは國境の北端卽ちベルギーの境より南三十哩の地にありストラスブルヒはメッツと國境の南端卽ち瑞西の境とのほゞ中央に位せり此兩市は其外郭の防禦線內に如何なる大軍をも收容し得べく絕好の根據地たり乃ち獨人は此兩市より鐵道を東方に出して國境より遙かの後方に於て兩者を聯結し更に之を內地に通せり故に獨人は咄嗟に此兩市の二若くは其一に大兵を集合し得べく又毫も敵に探知せらるゝ危險なくして兵を其一より他に之を移動することを得ざれば佛兵が獨逸に進擊せんとする時はメッツ及ストラスブルヒの前面に如何なる獨の大軍をも牽制するに足るだけの兵を備へたる後ならざるべからず然らざれば佛軍は直に左右背面何れよりも獨軍の攻擊を免れず況んやメッツストラスブルヒを牽制せんが爲めには佛の常備兵の全力を之に用ゐざるを得ずして進擊軍は必ず豫後備の比較的戰鬪力薄弱の者となるべし

勿論獨佛共に國境なる第一線の他第二の防禦線を有すと雖も此點に於ても獨逸は地理上大なる便益を有せり假に獨逸の第一線破れて佛軍獨國內に進入したりとせんにラインの長流は佛軍のために大なる障礙となり佛の大軍が之を渡るには多少の時日を要し其暇に獨軍は充分に準備を整へ得べし

要するに獨佛兩國の國防方針の相反背せるは全く地理上の必要より出たるに過ぎず佛人は力を國境の防備に盡し獨人は力をメッツとストラスブルヒの二地の防備に盡くして國境は開放の姿と爲せり佛人は獨軍をして一步も國境に踏み込むこと能はざらしめんとし獨人は佛軍の進出を俟て之を擊滅せんとす嚴酷にいへばメッツ、ストラスブルヒは之を攻擊戰の根據地としては無雙なれど直接防禦の目的より論ずればさして重要の者といふを得ず現今の形勢より推論すれば獨軍が攻勢に出づれば多大の損害を蒙るならんも成功の見込なきにあらざれど佛軍が攻勢を取らは其失敗に終はるべきこと確實なるが如しされど古來歷史に於ては意外の事實が現出すること多ければ此等の

攻究も實は机上の兵法に過ぎずと知る可し其は兎もあれ獨佛國境の人工的障壁の嚴なるは氷雪不斷の高山峻嶺が兩國間に横はれるに異ならずといふ可し（ジョージ歴史と地理との關係）

一將の値兵四萬

一八一四年の戰役に於てナポレオンの勢次第に蹙まるナポレオン毫も憂苦の態なく一日元帥マルモンに謂て曰く我兵力は依然として十萬なりとマルモン驚て曰く否々我兵次第に減損して今や實に六萬となれり閣下之を知らざるかとナポレオン大に笑て曰く然り吾之を知れりされどマルモンよ兵六萬と吾身とを合せば十萬の兵力となるなり汝も亦た迂ならずやと（ロース、ナポレオン傳）

文字通りの立ち往生

我邦に於ては辨慶の立往生といふ事あり一茶話に止まれど此事を實地に演出せしをエルンストフォンマンスフェルドと爲す此人は三十年戰爭に於てバルツ公フレデリキの客將となりしが節操無く智慮なく横紙破りの大將にして猪武者といふより他一の讃辭をも與ふる事能ざる人物なり彼はワレンスタインの爲めエルベの戰に於て敗られホンガリアの地方よりベネチアに出で英國に奔らんとせしが病を獲ボスニアの一僻村に到りし時病革まり復た起つ能はざるを知るや甲冑を着し帶劍を抜き持ち從者をして左右より身體を支持せしめ其儘瞑目せり其最後の勇ましき樣は今日に至るまで同地方の人口に膾炙すといふ

カブール伯開戰の期を豫言す

一八五八年サルヂニア國主相カブール伯プロンビエールに於て佛國皇帝ナポレオン三世と秘密會見を遂げ兩國の間に密約を訂しナポレオンは墺國がサルヂニアを攻擊するを以て應援義務發生條件（Casus foederis）と爲せり故にカブールの苦心は墺國をして攻擊的態度に出でしむるにありしが一時は形勢甚だ非となりナポレオンは和戰の間に搖蕩して決心鞏固ならず且又各國に秘密通信員を有して不思議なる迄外交の機微に通曉せる名士マッチニの如き墺國は如何に之を挑發するも戰意無きことを明言するあり歐洲外交界の輿論も亦た墺國が攻擊的態度に出づることなきを信じき同年十二月オドーラッセル氏はトリノ府に遊びカブール伯と會見して時局を論評し墺國が軍備に汲々たるは虚喝を以てサルヂニアを壓せんとするにありて眞に戰意あるにあらざるを斷言せりカブール曰く墺國眞に戰意無しとするも予は墺國をして開戰を餘儀なくせしめんとする者なりとラッセル其自信の强きに驚き半冷笑的に反問して曰く然らば其期は何時なるかとカブール曰く遲くも來年五月の第一週とラッセルはポッケットより手帳を出して之を書き留めしが是は如何に墺國は一八五九年四月の末を以て宣戰しカブールの豫言に先つこと實に數日に過ぎざりしなりラッセルは遇ふ人毎に此事を語りカブールの廟算神に近きことを驚歎せしといふ（チェサレスコ　カブール傳）

直進する能はざれば迂回すべし

伊太利統一事業殆んど成りてローマ問題喧ましき頃の事なりカブール伯は一日友人と對座してありしに其友は熱心に羅馬問題を談じ荐りに其困難なる所以を述べて終に此問題の解決を以て不可能なりといへりカブールは默して其友の說を聞きつゝありしが徐に立ちて一のインキ壺を取り之

をテーブルの一端に置き友を顧みて曰く見よ此所より其インキ壺に至らんとすればかく一直線に進むより良きは莫し（手を以て机上に線を引きつゝ）然るに今其半途に於てある障礙物に遇ふと假定せよ予は冒進して之と衝突し予が頭を壞るが如き愚を爲さずされど此障礙の爲め後退も爲さず予は暫時其場に停止して徐に狀況を察して後右若しくに左に迂回し靜に目的物に到達せんことを圖るべし何の絕望かあらんと蓋しカブールの所謂直線とは羅馬敎皇と平和的協商を以て此問題を解決するを指せるなり（同上）

ビスマルクの機智

一八六六年墺普二國大にサドワに戰ふ兩國の興廢懸りて此一擧にありビスマルク深く心を惱まし戰酣なるに及び參謀長モルトケの意見を叩かんと欲し靜に之に近けりされど不束なる問を發して氣六かしき老將軍の叱責を招かんことを憚り暫らく躊躇せしが進んで將軍の傍に至りシガーの匣を出して之を献じ退ひて竊に將軍の擧動を窺ひしにモルトケは無言にて匣を受け一々シガーを驗し最上等の一本を取り出し復た無言にて之をビスマルクに戻せりビスマルクは將軍の沈着なる擧動に因り戰鬪の狀況我に利あることを推し亦た無言にて匣を受け取り一禮して將軍の傍を去りき（エミルライヒ近世歐洲の建設）

怪名

英國のクロンウエルの時代ゼリットル、バーリメントの議長となりしロンドンの革商ベアボーンは甚だ奇人にして其兄弟の一人の名は Christ-come-into-the-World-to-save といひ他の一人の名は一層長くして If-Christ-had-not-died-thou-hadst-been-damned といひしは怪名として有名なる事なるが我國にても怪名少からず次に隨筆翁草に見ゆたる怪名集より最も著しき者を抄出す是は享保十九年（約百七十年前）の調査なりといふ

藤堂大學頭家來　七里鎌倉兵衞　紀州家家來　吳　官治左衞門
松平大隅守家來　疋和田四方四五右衞門　同　李　佐保之介
同　七寸五分刑部左衞門　同　且來賀多右衞門
同　谷　谷　谷　谷　同　了　治　泉
松平陸奥守家來　八　幡　男　也　松平大和守家來　猿　木　梶　摩
同　三方一所　典膳　同　勾坂　內藏卿
松平伯耆守家來　古屋敷跡新五郎左衞門　同　塵子田　角摩
松平修理太夫家來　竹下太郎八左衞門　同　加留多多之右衞門
同　小　助　助　助　松平甲斐守家來　穴山　宮內兵衞
酒井雅樂頭家來　一石八斗兵衞　松平下總守家來　伊藤　車戸二
牧野河內守家來　入交彌六左衞門
鍋嶋攝津守家來　嬉野白石社宗彌次郎
水野日向守家來　大岡田村正九郎助之進
松平備中守家來　平　平　平　平

文苑

置みやげ

雨森一鳥

北國の冬は氣象上如何なる關係を持つて居るかを知る爲めに先中央氣象臺編纂の「大日本風土論」と云ふのを繙いた。北陸道は「冬期に於て日本海上の濕氣卓越風に伴ふて本邦の主山脈に衝突し、忽ち上昇の傾向を生じ、乃冷却して其帶ぶる所の濕氣を遊離せんとす、是を以て裏日本冬期の天候は常に陰鬱にして濃雲漲り、日光を見る事甚だ罕に、常に雪霰霏々として降り、降水あらざる日は冬期を通じて殆んど絶ゑて無きなり、就中越前、加賀、越中、越後の如きは皆其本に高山連亘せるを以て降水特に多く、海岸に於ても積雪概ね一米を越ゑ、僅に海岸を離れて山麓に進めば、三四米以上の積雪を見るも亦寡しとせざるなり」「越後地方を發して東京に行かんと欲し、三國峠に至て後面を顧みれば密雲疊々として殆んど咫尺を辨せざるも、飜て前面を望めば滿天殆んど片雲を見ず、空氣甚鮮明に、日光山嶽平原を照して數十里の風光一眸に入り、表裡兩面天氣の隔絶甚しきに驚かざるは無し」と書いてある。予の中學時代敎へられた所と大差ない。これを東北平野の冬に比べると非常な相違である。東北の冬は雪も多い、寒さも嚴しい、軒に二三尺位の氷柱が垂れ、川の水さへ氷る、風は冬季に於て殊に烈しく、松並木は幾本も雪に倒れることがある。而て天氣の佳い時は一週間も十日も晴天打ち續き、日光は鮮かに氷雪の上を照して荒凉たる平原は冷嚴、蕭殺、莊大の光景を呈する、ふる時は卽天を掩ふてふり、晴るゝ時は卽空に一抹の雲影をも認めない、陰鬱にあらずして明快である、不得要領にあらずして甚要領を得て居る。自分は國を出でゝ東京の冬を經驗し、それから金澤の冬を經驗した、勿論金澤の冬のみを以て北國の冬の眞相を窺ふ事ができぬかもしれぬが、兎も角もこれを東北の冬に比較すれば其相違は非常である、予は益ゝ東北平野の雄大なる冬日の光景を感せざるを得ない。國を出る時、母は「越後は雪の名物と云ふから、越後の近くなら雪も寒さも大したもんだらう」と云うた、其時自分は北國の冬を想像して恰も東北平野のそれの如く考へて居た。しかるに金澤へ來て實際に話できいて見ると自分の考へてゐた所とは大に違ふ。學校の小使にきくと雪は十二月の末でなくてはふらないと言ふ、この一事は自分の想像とは先たがつて居た、自分は天長節には必ず微雪あるものとして居た。淡雪の間に菊の花を折つて式場に運ぶ事は故郷の小學時代によくあつたことである。金澤へ來てから約二ヶ月半、秋の中頃から淫雨頻りに下り、金澤は愈ゝ「雨の都會」の眞面目を表した、十二月の幾日には霰が降り、軈て大粒の霰の窓を叩くこと二三回、名物の雪はかくして雨の都會を訪れたのである、降雪が尙數回あつたかも知れぬ、舊年は爰に終を告げ、新年の冬となつたが尙ほ雪よりは霙が多く、霙よりは雨が多くして空は常に盲目の瞳のやうであつた。一月の半ばになりて雪らしい雪が降り、二月に入りて寒氣は比較的強く、雪も可なり降つたが晴天と

ては殆んど無く、日光を見る事が出來ない、三月に入りては尙二三回の疎雪あり、雪に續いて雨となり、春雨のけぶる中に陰鬱なる北國の空は蘇つた。これは三十八年の秋の末から翌年の初めまでの日記の概括であるが、三十九年も四十年も殆んどこれと同じやうな冬に遇つた。予は爰に材料不足の爲め昨年の終りからの日記を引用して此間の天候の變遷をのべたいと思ふ。

十二月十五日——初雪降れり、冷き日也。

一月四日——白雪霏々。

一月七日——雨聲軒をめぐり、夜は暗し。

二月二日——珍らしく淺野川沿岸を散策す、梅も咲くべき日なり。

二月三日——若草も萠ね出づべかりし暖かさの急にあとをおさめたるは遺憾なり、疎雪飜る。

二月四日——今日は節分にて豆を撒く可き日なり、寒氣肌に徹し、薄雪飛ぶ、日光を見ざる十日。

二月八日——頭痛み、心地惡し、休校。

夜は雨ふり、隣家笛を弄す、頭に響き、不快言ふべからず。いやなり、いやなり、北國の冬はいやなり。

二月九日——疎雪、寒氣强し。

あゝ早春の森、春の木の芽、草の香、土の春、鳥の啼く音、一ヶ月の後わが心蘇る。

二月十一日——夜來の雪七八寸、日光雲間を洩る、降雪疎々たり、郊外！郊外！あゝ郊外の春。

二月十二日——夜來雪ふれり。

田圃の畔、路の臺見ゆる頃になりたらば轉宿すべし。目白を飼ふべし。

早春の森！濕りたる朽葉の香！吾は青蛙の如く蘇る。

あゝ野火！野火！放火犯は犯しても野火はつけて見たし、大目に見て貰ひたし山の所有者。

二月十三日——これにて雪はふらざるべしと小使は言ふ、さもあるべし。

二月十八日——雪飜る、陽春今何處にかある、あゝ壠頭の春、

茅屋在り、菜の花之をめぐる、一望黃雲を望むが如く、日輝き、鷄啼き、風は暖にして和、水長く畔路を行き、草の香、土の香、肥料の香風に交る——あゝわが空想裡の春。

二月二十一日——空晴れ、日輝き、風嫋々たり、家內にありて却て冷氣を感ず。

二月二十四日——夜來の雪早朝六七寸に及べり、終日密々としてふる、風は死せるが如く、滿空黝色を呈す。

二月二十五日——寒氣强く、日光雲間を洩る、夜は風無くして靜寂、點滴擔端を傳ふ。

二月二十六日——寒氣强く、空に雲わだかまる。

二月二十八日——野町郊外より野々市村に至る、春水田圃の畔を流れ、水車かゝる。麥青く、鷄頻りに啼げり、茅屋點綴す。森下町の郊外に比して大に趣を異にす。

三月一日――雨あがりの泥濘み多けれど風ゆるくして郊外の散策によし。

三月四日――夜來の雪寸にみたず、寒氣嚴なり、雨となる。

三月五日――雨なり、滿天死灰の如し。

かく列記したる所にて見ると要するに不得要領の天候と言はねばならぬ。右の記事に洩れた中には勿論雨は多い。中には「空晴れ、日輝き、風嫋々たり」などあるけれども實景は此通りではなかつた。連日雨に苦しめられ、頭の具合も惡かつたので、適〻日光の輝くを見て大に誇張したくなつたのである。しかるに北國の冬の空の陰晴定り無き、一日の中にも幾度も變る、今日の天候を以て明日をトする事などは到底出來ないのである。果してその日の夕暮から空がかき曇り、風さへ添うて、夜に入りて雪は降り出し、其翌日の午後迄で降りつゞけた。二十四日の記事に「夜來の雪早朝六七寸に及べり、終日密々として降る」とあるは卽それである。余は此不規則なる天候をむしろ腹立しく感じたので、夜は寒燈の下、檐端をめぐる雨聲をきゝながら頻りに春色に朶顧したのである、つまり「冬」其ものに僻易したのではなくして、陰氣な、不快な、煮へ切らない天候に閉口して一日も早く北國の冬の領內をのがれ去らんとしたのである。北國の天候の陰鬱なのは四季を通じてしつかりとも云へぬが、冬季は殊に甚しい。氷の張らない所や、吹雪の巷をふきめぐらない所は穩やかな冬かも知れぬが、雪よりは霙が多く、霙よりは雨の多いのも思ふにこれかためであるのだ北國は地勢上降水の最も多い所であるから雪にあらざれば霙、霙にあらざれば雨のふるのは當然であるが、もし冬日の寒氣が嚴烈にして風も亦强かつたならば、北國の冬は

尙明快で、要領をゑて居たかもしれぬ。初めて北國を旅行したものは必ず其家屋の構造に注意したのであらう。軒は低く垂れ、庇の外に出張つて居るのは雨雪をふせぐためである、庇は幾年か雨にうたれて灰色を帶びて居る。試みに雨のふる日市中の大通を徘徊して見よ、街路の兩側に立てる家々は恰も頭痛に呻吟して頭を低く垂れて居る病婦のやうに感ぜられるのだ。余は故鄕にありて幾度か酷烈なる寒氣と夥多なる氷雪とに遇ひたれども、未だかゝる陰鬱極まる冬を送つた事は無い。「三國峠に至りて後面を顧れば云々」の一節は最もよく陰慘なる北國の冬と鮮明なる關東平野の冬とを對比したものと言はなければならぬ。余は爰に彼の俗謠に「越後出る時や涙で出たが、今は越後の風もいや。」と云ふを氣象學的に說明しても面白いだらうと思ふのである。

文覺獨白

一

とし、や

われ、道心を奮ひ起してより既に七十有餘年、三たび大峰に籠り、二度葛城に行ひ、高野、白山、富士、箱根、出羽の月山、信濃の戸隱、凡そ日本國中の名たゝる靈場殘る隈なく修業せし身も、こゝ隱岐が小島を、今は最後の地と覺ゆるぞ。時や晩秋、風吼へて潮騷き、雲亂れて雨しきりなり、耳側つれば闇を破る落葉の音、目を擧ぐれば蕭條たる山河の姿。われ、生を此土に享け

て茲に八旬、末期の程も遠からじ。いでや事多かりしわが越し方を、思ふがまゝに書き散らさむず。

二

輕きを嘆つ六尺の長劔、惜氣もなく投げ出し、圓頂緇衣に身を變へしは、われ盛遠と呼びし昔語り也。若氣の過ちとは申しながら、操正しき女性が命を失ひしは、げに罪深き所業なりしよ。かくてわれは修業始めぬ。頃は眞夏の午の刻也、風全く死して草ゆるがず、日光いやが上に照り渡れり。われ、とある山里の籔に入り、裸になりて仰のけに伏す。虻ぞ蚊ぞ、蜂蟻なんど云ふ毒虫共が、身に犇と取りつきたれど、七日の間は些とも體を動かさず、八日と云ふに起きあがりて「修業とは是程の事やらむ」と問ふに「あはれ剛なる人よ」とて人々驚きの目を、みはる。さては平安ござんなれとて熊野に行きぬ。那智は天下第一の靈場なれば、聞ゆる荒瀧に籠りてくれむずとて瀧壺に下るに、折から極月の末、大雪の日なり。峰の嵐吹き氷り、谷の小川も、ひつらゐて滿目悉く皓々たり。われ、か計りの事何かあらむとて瀧壺に躍り入り、首際まで、つかりて普門品の喝、高らかに誦す。さわれ身もとより鐵石に非ざれば、幾度か生死の境に彷徨ふを、不動明王の加護によりて、三七日の大願、遂に爲し遂げたり。嬉ばしや、その後は風も身に泌まず、水は湯の如く、誦經の聲、山風に乘じて吹雪と共に散じ、滿山を搖るがすさまは、われながら心すがすがしき極みなりしよ。

かくて一杖一鉢、故國の山河踏破し盡して、洛外は高雄の山に行ひ澄ましぬ。

三

抑も高雄の神護寺と申すは稱德天皇の御宇和氣清麻呂の建立也。今や扉、落葉の下に朽ち、甍破れて月の入るに任す、「山堆うして鷲山の梢を現し、谷靜にして鷄山洞の苔を敷けり。岩泉咽びて布を引き、嶺猿叫びて枝に遊ぶ。人里遠くして囂塵なく、師跡事なくして信心のみあり。」されば、われ如何にもして此寺修造せんとの大願を起し、諸方檀那を、すゝめありく。

治承三年、彌生の末、われは院の御所、法住寺殿にこそ參りたれ。御奉加あるべき由奏聞すれど御聞召、更になし、こは、たゞびとの申し入れぬるぞと心得て、御壺の內に跳り入り、勸進帳ひきひろげ高らかにこそ讀みたむなれ。折から院は管絃の御遊、せさせ御座します。わが大音聲に調子も狂ひ、拍子も皆亂れたり。「何者の狼藉ぞ、そッ首拔け」と仰せ下さるゝに、院中のはやり男ども、われ先にと進み寄る。こざかしきへろ〳〵武者が振舞かなと、われ左手には勸進帳、右手には刀を拔きもちて、心のまゝに荒廻る。院にては思ひもよらぬ俄事なれば公卿殿上人の腰ぬけ共が、狽てふためくその樣は、まこと、笑止の極なりしか。

かくてわれは禁獄せられぬ。われその時「三界は火宅也。玉宮と雖もいかでか、その難を逃るべき、たとへ十善の帝位に誇りたらうとも、黃泉の旅に出でなむ後は、牛頭、馬頭の責をば免れ玉ふまじきものを」と跳り〳〵申したれば「文覺こそは勅勘蒙れる身の、神妙にこそあるべきに、あの勝ち誇りたる者のやうなるは如何に、さては此事僻事にや」と人々安からぬ色あり。

時しも美福門院隱れさせ玉ひて大赦あり。われも亦ゆるされぬ。

されば又勸進帳捧げて「あはれ、世の中、唯今、亂れて君も臣も亡びなむずるぞ」と洛中洛外、足に任せて申しありく。この法師奇怪なりとありて、われ伊豆に罷りぬ。

あゝ國に賢臣なんども、あるなれば、事の未然に防ぐ術もあるべきに、驕る平家の盛りの花に、散りての後の哀れは思はず、徒に近畿一帶の山河に眤みて管絃を事とし、わが警世の聲を、空ふく風と聞き流せし六波羅武士の優長さよ。あだに富士川の十萬餘騎を怪しまんや。

さるにても、兵衛佐が配流の地たる伊豆の國に、われを放ちしこそ可笑しけれ。この時、かの廳の下部もて清水觀音房へ物かゝせ、遠州灘の大風に龍神を叱り飛ばせし事どもは、煩しければこゝには云はず。

四

伊豆の國は奈古屋の奥に庵を結びぬ。

佐殿が蛭が小島に程近かければ、常に參りて御物語りす。佐殿の器量ゆゝしくぞ見ねし。われ一日しみ〴〵と謀反をすゝめ參らせたり、「平家の重望を一身に負ひし小松殿は、既に亡き數に入り玉ひぬ。今源平兩家を見渡すに御邊を、おきて天下の將軍の相、備へたる人なし」と申すに、「それ、思ひもよらず、唯、故池の尼御前の冥福を祈らむため、日毎に法華經一部轉讀するより他事はなきぞかし」と宣ふ。われ重ねて「天の與ふる所取らざれば、却りて、その咎を享くと云ふ事あり、御邊のために、つくせしわが誠の程を見られ候へ」とて、白き布ときて、とり出す髑髏一片。これこそは平治の昔、獄卒より乞ひとりし、故下野殿のかはり果てたる御姿なれ。

かくて佐殿も意を決したり。われ、その旨をうけて奈古屋の庵に立歸りぬ、弟子共には「伊豆の御山に七日の參籠ぞ」と申し置き、三日と云ふに福原の新都に上り、前右衛門督光能を以て、折から押しこめられて御座します、法皇の院宣賜り、又百五十五里を飛ぶが如くに馳せ歸り「く、は院宣ぞ」とて奉れば、佐殿恭なさのあまりにや、新しき烏帽子、淨衣して、手水含嗽し、院宣三度拜せられけり。これを見たるわれ、胸すく計りに心よかりし。

五

世は轉じぬ。平家豪華の夢、已に破れて、海道の軍、利あらざるに、北土俄に雲亂れて、木曾の五萬騎は比叡の前後に充ちみちたり、あはれ、たとへ一人とならむまでも、都に踏み止りて、如何にもなり玉ふべきに、主上、神器を擁し參らせ、故郷を燒野が原と顧みて、行衛もしらず漂泊の旅に立出でし、平家の人々が所存の程こそ、かへすゞ〴〵も心得ぬ。

かくて戰ふ毎に破れたる一門は秋の夕日と共に西海の果に沈み了んぬ

醜なる哉、權勢に媚ぶるは人の常、世また白旗を謳歌しそめき。かゝる間にわれはまた高雄の奥に歸りぬ。

この頃、三位中將維盛卿の嫡子六代、斬らるべき由聞ゆ、淺ましき事に思へる折柄、六代の乳母訪ね來て「命乞ひあれ」とてさま〴〵にかきくどく。かくて奈須野の狩の宿に賴朝を訪ひ、强ちに六代を乞ひうけ、出家になすべき由申して、あはや駿河なる千本松原にて斬られむず間ぎはに救ひとり、高雄の庵に伴ひ歸りぬ。

あゝ昨日は源氏の衰微を憐みて、賴朝を草茅の間より立たしめ、今日は平家の沒落を悲しみて、六代を九死の中より救ふ。怪む勿れ弱者を濟ふはわが務めぞかし。

さはれ、齡、已に八旬を超えても革命の血潮は、皺だむこの皮一重の奥に湧き返り、事あれかしと願ふ心は常に絶えず。さればこそ、建久十年正月、賴朝薨去の後は、二宮を位につけ參らせばやと思ひぬるに、早くも此事、關東に洩れ聞え、折からのわが宿所、二條猪のくまに、兵あまた押し寄せぬ。かくて、こゝ隱岐が小島の島守とこそはなりたんなれ。

六

顧みれば事多かりしわが越し方かな。

さしも世に、ときめきし平家の榮も夢と消えぬ、今を盛りの源氏の花も嵐なくては、いかで、やむべき。人よ、犬ころの乳の滴りを慕ふが如く「平和」てふ名を心弱くも呼ぶ勿れ。われ文覺の一生に鑑みても見よ、われらが生命は「血」なり「涙」なり、「努力」なり、はた「建鬪」なりと、かへすがへすも申すにこそ。

響

○

たけを

我は春雨のさゝやきを好む。殊に京にて聞くを好む。天と地とを長く連らねて、我が思のむすぼるゝうちは、霽るゝなと許り、京の旬日を封じ去りて、しと々々と花に降り甍に降り、やがて庵の尺にあまる小窓の前に、千萬無量の思を貫き人知れず地に消ゆる、そのかすかなる呟こそ、舊き都の物語そ忍ばるれ。

○

九月の初めつかたなりき。雨烈しく降り出ぬ。虛空に狂ふ風の叫び杜を衝く雨の響き、庭には百日紅の紅の花、敷石の上に亂れ落ちぬ。雨を冒して屋根に登りぬ。空は限りなき怒色に蓋はれて一陣又一陣樹々の葉は空ざまに裏がへり、ちぎれては舞上れり、

桓根には花皆俯伏に倒れ獨り槿の蔓のみいたはしげにもつれ縋りぬ。

あゝ此怒號！夏と秋との境界に立てる巨人の叫び。

我はたのゝきの眼をあげて、すさましき過渡の混戰を見まもりぬ。

○

取り殘されたる風鈴の、袷きる頃の肌寒むの夜、リン々々と檐に鳴れり、夏の余韻やこもれると心淋しき事限りなし。鉢の片隅にや生命保ちしか蟋蟀のかすかなる聲を振り立てゝおぼつかなくも曲あはせたる

その朝風鈴をはづして今更ながら、行く夏の早やかりしを忍びぬ。

○

水の響は如何なるものにても心地よし。
烈しさは怒濤の叫喚急湍の歡呼。優しさは霞の底もる小川の歌、鈴蘭の根を走る清水の私語……
……樂人皆これを調にのせぬ。
されど我ある時、薄明の池のほとり歩み、不圖青錢を疊める荷葉のうちよりつとこぼれし水滴の、いともかすけき云ひ知れぬ音せしを聞きしことあり……かくの如きは未だ樂人の調にのらじと覺ゆ。

紅薔薇

青花

（フィッゼラルド譯、オマア、カイヤムの「ルバイヤット」より）

金砂子撒く大空の、眞夜の曠野の星くづを
闇もろともに追ひやりて、朝の日影あらはれぬ。
覺めよかし、日は大内の高塔に
「光」の征矢を放ちつゝ赫燿として照り榮ゆれ。
しばしの暗に入らむずる昧爽が、もたらす薄明に、
こは僻耳か、驛路の旅籠の内の嗄れ聲、
「禮拜の備へはなりぬ。いかなれば
うつら〳〵と門徒らよ、外面の眠りむさぼれる」
黎明近くなりぬれば漏刻の司の鷄の音に
宿泊の前の旅人は、「いざや朝扉を開きませ
　束の間のやどりと君も知ろすらむ
今し一たび去りもせば歸らるべきの旅ならず。」
微笑の春巡り來て、望の光若やげと
哲人詩人幾たりか沈默の鄕にのがれゆく、
　白妙の花咲き薫ず無憂華樹や
そこよ、嫩草萠えそめて、靈の呼息の香に匂ふ。
イラムの跡は古りゆきて、薔薇もろともに散りうせぬ、
はた、ヤムシイが七環の盃の影、人知らず。
　瓔珞や葡萄の房の濃紫、

いさゝ川邊の花苑は昔ながらの姿かな。

ダビテの唇は閉されぬ。神寂びにたる清淨の
美し音色の高鳴きに「酒をこそ、あな酒をこそ、
赤き酒」と薔薇に宿る歌鳥は
褪せし花の頰、紅に染めばやとこそ叫ぶなれ。

來れよ、みたせ杯を、陽炎もゆる春の火に
悔の冬衣、燒きすてゝ、醉ひたまはずや、さくら月
天翔る「光陰」は雲の通路を
刹那にわたる、羽搏や、――あれ鳥が飛ぶ、日は移る。

ナイサプァやバビロンの花の都の跡は、いさ、
甘き苦きの盃に論らはめや世の實相。
酒甕なれや、「生命」は絶ねず滴りつ
病葉としも眺むれば一葉ひとはと零れゆく。

薔薇の花の朝毎に咲くもあるをと宣へど
昨日の風に散りゆきし、あえかの色はいづちぞや。
春過ぎて、うばらぞ薫る初夏を
新魂いくつ逝きにけむ、大丈夫や貴人や。

大丈夫も貴人も、日毎に逝くはさもあれな
われに緣はなきものを、なぜ銷魂の聲あぐる。
獨りゆく、天が下には事もなし、――
富豪館のざんざめき、長者屋敷の夕宴。

共に行かまし、天離る鄙の牧場の綠野に、
こゝや荒れてし淺茅生と、新墾小田の隈なれど
王侯も乞食も同じ裸形かな
黃金眩き大宮の玉の階。――いざさらば。

われらが歌

主義も無ければ特長も無し。われらが歌は平凡なり。敢て新奇を求めむともせず、また勗めたることも無し。迂濶はわれらが會なるかな。志を同うするもの幾人、來たり會しては詠じ、吟じては快を行ふ。われらが會は延氣なり。僞と思ふ人あらば試みにわれらが會に入り給へ。次に掲ぐるは四の卷、五の卷、六の卷、七の卷の四集より抄錄せるもの、題はあれども煩はしければ省きつ。（和歌會）

其月

鐘の聲雲雀の聲の遠近やゆめより覺めし朝の洛外

岩の窪浪は右より左よりながき春日を縒れつ縺れつ

江の島は霞の中に遠干して繪日傘つゞく春の眞砂路

行めば草いきれする眞夏野や雲無き空に遠方雷す

紅梅の狩衣したるみやび男が金鼓うつなり明けの燈火

あけぼのゝ薄紫の舞の袖天女が掛けし松の藤かな

五月晴藥玉かけし高樓の風鈴鳴らし山風わたる

山館五月の欄に小雨して若葉のけぶり懷に入る

五月蠅なす人言繁し手な觸れそ物な言ひそね胸は湧くとも

かねて我がものせし小話日もすがら旅路に聞きぬ誠しやかに

木瓜

思出は夜の海わたる大浪の闇に遠鳴る聲にもあるか

み瞳は朝なぎすなるわたつみの浪の色とし胸にしみ入る

人を戀ひて死ぬるに惜しきひと時は戀としも無き熱き涙す

三四寸芋の葉越しに日を殘し五反歩ふみて歸る野の人

われもまた人に比肩し此の才と此の力あり男の子たるべき

古もかくあり今もかゝるべき君が眼に似る夕暮の星

雉泉

かなめ垣赤き芽ぞふく上根岸豆腐呼び入る初夏の朝

あゝ朝の心地に居らば五十年の命ことごと若やぎに居む

梨花の雨たまたま降るに母の忌よ柱に倚りて追憶に入る

五月野の若葉の靈とひそやかにさゝやくがごと吹く微風かな

大いなる力にすがり光明の世にも出でまく思ふ日頃よ

一面の罌粟吹く風の雨となり憂多かる樣に降る夕

竹花

朝月夜馬市さして馬うりに行く人多し夏の野の路

五月よし白蓮水に浮ふやう白雲ぞ湧く若葉の上に

若葉みな月に薫ずる山峽を白蛇にまねて走る川かな

男よわしうなじ巻く手をにやはとく陸をゆすらむ手力あるも

空仰ぎひそかに笑みぬ男の兒てふ美し念の胸に湧く時

心して答へ給へや一言は生死の糸のいづれかを切る

君思ふ長き思を糸に吐きおもひの繭をあまんとぞおもふ

これをしも戀とはいふか君が眼とわが眼と逢へば心とゞろく

あまりよう我が身に似たる話ゆゑ涙くだりぬ咎め給ふな

駒水

傘見にて振袖見にて人ゆきぬ京は柳に小雨する朝

夜の波白う滿ち來ぬ四十九里佐渡へゆくべき遠流の船に

いづちよりいづち行くとも定め無き風の響のさびしからずや

青葉若葉しげれる里にこもり居てよき歌多し初夏の頃

水の音にねざめよろしき山の宿藤の五尺は風にゆられて

われはよし天の扉に彫る名をなさむ利に走る子は蒼蠅に似ずや

幼くてわれに大なる望ありき今北陸奥の野守に足る身

光雄

梨の花ちるや大和の里の寺小窓に近う淡き月見る

風死して流水なき夏の野はまた野につぎてはてしもあらぬ

大わたや暮れゆく船のへに立ちて國なつかしと風に吹かれぬ

都ぶり衣のいろいろ糸ぶさの扇鳴らしていこふ女等

君が眼にうつくしと見る此の世をばあしとそしるは病める我が眼か

白汀

戸に倚れば梨の花照る薄月夜友やこひしき家鳩の聲

かくしてのつひの我が身や如何ならむ昨日の小櫛はやもふさはず

ゆくりなき假寐の夜の戀ひしさにひとり覺にぬなつかしき風

君が紡む糸にいかなる罪あらむ我が身に纏ふ衣の戀ひしき

手のひらに煙草はたきて渡場の翁若葉の五月淋しむ

行く春の恨と悔の千言に泣かれぬ程の大けさ我が身

日當りの砂に籠り居せし鷄は温氣に飽きて伸びて羽根うつ

群羊の角吹く人も熟睡する牧は眞夏の風なき日なり

つゝじ岡菖蒲池經て朧夜を牡丹の宮に花嫁はゆく

門外

入相の鐘にしのぶやたらちねは冬の寒さをいかに送ると

なき人の夜を守りつゝありし世のありし樣をば涙語りつ

京木

鳥雲に入るを見にけり鴻臚館朝ゆく人を如月送る

こよろぎの磯による波來よる波春の潮を灘よりよする

勅選の歌卷編むや昭陽舍紀氏など見えて梨の花咲く

よき程に吹かれてゆらぐ青すだれ風をほめ居る夏座敷かな

祭見の人いろいろに裝束きて若葉なかゆく加茂川堤

いらへだにしまさぬ君は縛めて女人の國にやるべかりけり

雨とならばあるものあげてとこやみにしぬべき雲の重なる五月

大いなるものと物皆ながめたる昔幸あり驚く眼欲し

水無月の御禊すぐるや夏の雨さよむるばかりひと時ふりぬ

四高俳句會吟草

花芥子や　針の師匠が　内畑　紅芙蓉

夏帽や　見忘れ顔の　村の者　同

夏帽　や　月の浦風　小島の灯　同

行く我に　雷迫る　雲暑し　同

花合歡や　雷雨將に　來らんとす　同

むし暑き　内行水や　はた〻神　同

水艸の　花にとまりぬ　水馬　同

煙立つ　あたり誰住む　若葉かな　同

淺草に　子守が遊ぶ　日傘かな　同

眞珠採る　木曜島や　春の海　京木

ころ〳〵の　兎の糞や　蕨生ふ　同

萬燈の　河に浮たる　祭かな　同

青葉ゆく　網代車や　川堤　京木

駄菓子屋の前に畑あり芥子の花　同

夏帽を　買ひし歸省の　前夜かな　同

卯の花や　見入れの家の　垣低き　同

雨たま〳〵晴れて植木の市さかる　同

苗代の　青や夏めく　眼に新た　美島

桐の花　窓に手習ふ　子供かな　同

朝　嵐　青葉吹まく　灘五郷　同

檜　若葉　山藤光る　葉裏かな　同

下さずの　雨の祭の　幟かな　同

素裸に　壯丁並ぶ　檢査かな　同

見せばやの綺羅を飾りし祭かな　蛤城

追へど墓　悠然として　飛にけり　同

病院の　黑門高し　桐の花　孤月

水馬　重り合うて　流れけり　同

蕨採つて、歸りを雨に　急ぎけり　溯村

大鳥居　糺の森の　若葉かな　金桂

柴笛をすさぶ人あり　庭若葉　醉巴

池の端　朝の人出や　蓮盛り　飛化

倦き果てし　書見の閑や　墓　同

春の海　和寇の沙汰も　噂ぎり　秋雨

(北國)膳に上る鰯ばかりに春暮る〻　同

袂から出す　へな〳〵の蕨かな　同

はしためのの　翌を祭に結ふ髮か　同

衣更へて　隣へ產の　見舞かな　同

今年ぎりの猶豫なりしが檢査かな　同

野の家やよき子育て〻芥子の花　同

卯の花に　野天仕事の桶屋かな　同

石に腰　童がはやす　競馬かな　同

借りて　住む　男やもめや　墓　同

水郷や　水に明けゆく藺田蓮田　同

十四番句合

紫影先生判

一番　櫻

左　千本の　櫻に　千の　灯かな　京　木
右　室町を今の世にみる花見かな　紅芙蓉

右は義滿將軍が北山の花見に思寄せしにや、左の花の灯いと花やかに明なり

二番　櫻

左　花に醉うて　猿樂言も咎なし　秋　雨
右　我舞へば　人皆囃す　櫻かな　水　郷

右勝

三番　囀

左　我旅の　明日占うて　囀るか　水　郷
右　囀や　端山御坊に　普茶料理　醉　巴

左巧に言ひなしたり勝

四番　朧

左　祭の灯　十二末社の　朧かな　水　郷
右　江の島の　松は朧や濱に歩す　美　島

左勝

五番　囀

左　囀や　無言の　行の　永平寺　水　郷
右　囀や　麓　楊臺　狹　斜　の里　紅芙蓉

楊臺といふ語ありや章臺の思違ならん歟、左の永平寺も突然の感あれどまづは勝

六番　囀

左　囀は　雉子の羽音に默しけり　醉　巴
右　囀す　人なき　晝の　理髮床　京　木

右囀やとして勝

七番　櫻

左　幔幕の花に　糸竹の　響かな　蛤　城
右　奈良へゆく峠の茶屋や花一木　醉　巴

右勝

八番　朧

左　白木屋へ婿が來る夜の朧かな　秋　雨
右　嫁入りの車つらねて　町　朧　醉　巴

右陳腐、左も同樣の趣向稍舊套を脫せんと計りたるらしけれどさして成功せず、持

九番　繪踏

左　長崎へ妓に賣られて繪踏かな　水　郷
右　松倉の　治蹟擧らぬ繪踏かな　秋　雨

右勝

十番　囀

左　囀の　障子に　影や　何の鳥　蛤　城
右　囀や　夕日　たゆたふ　楢林　美　島

右勝

十一番　囀

左　囀や　虛病で寐たる　閨の午　秋　雨
右　囀や　村の　役場の　晝餉時　京　木

右勝

十二番　櫻

左　清玄に　女見惚るゝ　櫻かな　秋　雨
右　火葬場のヒョロ〳〵櫻咲にけり　紅芙蓉

右見つけ所新らし、左の草册子は古めかし

十三番　踏青

左　遲々として汽車のゆく野や踏青す　京　木
右　青踏んで　戻る根岸の朧かな　秋　雨

右勝

十四番　櫻

左　梅室が　一瓢腰に　花見かな　秋　雨
右　櫻狩　動物園に　まはりけり　紅芙蓉

右餘りに平凡左梅室では恐入るさりとて誰を倩ひ來りても一瓢腰に花見では用文章その儘なり、むしろ「宗匠が」として死中に活を求めんか

桐の花　秋雨

絶えず人代はる下宿や　桐の花
花桐や　屠らるゝ牛の　聲悲し
花桐の　門標札や　知名の　士

花桐や　畠の　中なる　裸宮
下宿さす家かと問ふや　桐の花
黑木積む　風呂屋の庭や桐の花
窮屈な　宮家　奉公や　桐の花
野の中に立つ火藥庫や　桐の花
監獄の　裏に　廣場や　桐の花
不淨門　閉されてあり　桐の花
屆濟　の　假板塀や　桐の花
花桐の　門や　愛國　婦人會
停車場の　倉庫二三や　桐の花
桐の花　窓からみゆれ　銃器室
花桐や　測候所　の　掲示板
近衛家の　高塀越や　桐の花
賣らばやの　隣屋敷や　桐の花
勅封の　正倉院や　桐の花
（行軍）
花桐の　宿は　大隊　本部かな
花桐の　門忘れめや　素讀の師
町庭のうたてきものに　桐の花
千駄木に　博士住けり　桐の花
物あさる　鴉いにけり　桐の花
花桐の　寺や　臨時の　救護班
花桐の　寺の室かる　自炊かな
山驛の　軍用旅舍　や　桐の花
花桐や　足利文庫　猶　存す
時習寮
學寮　の　養牛場や　桐の花

南下軍

南下軍再び敗れたり、

野球先づ三高の乘ずる所となり、次で庭球は六高のために思ひ設けざる不覺を取る、庭球、軍容を正して三高と格闘せしも運命我に拙く、最後に野球は七高に戰を挑む、之亦我に非也。四度戰て四度敗をとる。去年の跡思ふぞ悲しきに今又敗衂に敗衂を重ぬ、征袖露のひる間もなし。嵐山の春や色未だ淺し、諸肌をし拔ぎ大地に伏して櫻染めなさんはいと易けれど、後運また期して俟つ可し、はやまる可からず、焦る可からず。

雪を衝き、雨を冒して既に一年我泣いて復讎に腐心す、而も事就らず、無限の怨を一沫の黑煙と吐いて京洛を辭するの止むなきに至りぬ、然れ共、靜かに實力を養はむには尚一年あり、二年あり、失望す可らず退縮す可らず、大に忍んで長鳴の機を俟つべし。

云はずや、ローマは世々の血を以て飾られたるが故に麗はしと、光榮ある戰勝は血を以て獨り之を購ふ可し。炎帝よ來らば來れ、我汝と苦闘せむ冬王の來り襲はむ時には我紅蓮の熱氣を吐いて爾に拮抗せむ、一陽來復するに當つては大鵬の如く驅けて我三度洛陽に迫らん、之を四度する可也、五たびする可也。さもあればあれ、吉田原頭に叫ぶ我勝閧の三十六峯を搖り動かし、余韻遠く引いて琵琶の銀盤に落ちて波紋を生ずる迄、友よ南下を續行せよ、南下の初一念を貫徹して四高の氣焰を擧げよ。（かたし）

寒潮事件

思慮淺き市井の一新紙、材を我校に取り「寒潮」と題したる小說を掲載し浮薄なる世人の好奇心に媚びんとして曲筆を弄す、少時其爲す所を伺しに彼益々圖に乘り惡罵至らざるなく、卑猥なる描寫を逞うし累を神聖なる我校に及すこと一方ならず、依て努を彊り此輕燥兒に一矢を酬ゆるの機を俟つ。

思出多き本校創立紀念日に健兒勇躍して彼輕燥なる新紙に膺懲の一擊を加ふるや彼忽ち筆を擱いて謹愼を表す、後來かの輩をして再び斯擧に出でさらしめん爲めボイコットと云へるお灸を施すや彼狼狽を極め一切の武器をかなぐり捨て丶一只寬恕を哀願す。我もと深き戰意なし偶々大天の使命を帶びて正義を宣傳せしのみ、卑劣なる町人根性を矯めしのみ、北辰健兒の意氣の一端を發露せしのみ、彼れ新聞紙にして前非を悔いんか、我亦死地に追及するの浮目を彼に課するものならんや。彼深く其非を悟り再びかゝる輕擧に出でざるを誓いしを以て彼を放ちやり大に凱歌を奏す。（かたし）

牛頭馬頭

雨森　一鳥

雜報だから何を書いても可い譯だ。甚だ自由である。勿論書く內容は極く詰らない。瀉石の所謂低個趣味とか何んとかをやつて四辻に立つてそつと懷帳面を認めると云ふ格だ。下るもの下らぬもの、詰るもの詰らぬものを襍然と排列すれば幸にして讀者の目を胡麻化すに妙を得て居る。

敗戰即勝利

敗戰と退嬰とは吾等の勝利である。吾等は敗戰と退嬰との間に自己の勝利を見出さねばならぬ。敗戰と云ひ勝利と云ふも畢竟自らの敗戰勝利なのだ。彼の爲めの勝利は軈て我自ら爲に勝利である、勝鬨である。吾等には敗戰は無い。

無意義なる通信

無意義なる通信を止めよ。一書翰を認むるに要する努力は眞に千金を値す。多く書くは多く自分を卑下する也。

矛盾と調和

矛盾と調和とは必ずしも矛盾するものでは無い。理論上の矛盾は實際上の調和であり、實際上の矛盾は理論上の調和なる事實は數々吾人の遭遇する所で一向故障が起らない。否吾人日常の生活は凡て此矛盾と調和との實際一致に外ならぬ。

人間と矛盾性

人間には大なる矛盾性がある。否人間であればこそ此矛盾性に支配せられて居るのである。我等は已に神では無い、禽獸でも無い。只の「人間」なのだ。「人間」と生れ「人間」として活動するが故に此矛盾性に支配せらるゝが其至當である。否人間本來の面目である。人間の價値は從て此面目に存する。靈的生活と云ひ、肉的生活と云ふも畢竟人類の矛盾性を兩極端より解釋したものであつて何れも其本來を無視したものである。靈の事を思ふは生なりとも云へない、また肉の事を思ふは死なりとも云へない。靈肉の何れを捨て、何れを撰ぶべきかは吾人の願ではない。愁ひに之を撰び之を捨てんとするからこそ衝突も起るのだ。偏するに道のないものを偏せんとする。實に愚な話しだ。靈肉衝突の一喜劇は吾等多く之を現今の宗教的生活に見る、其

愚や笑ふべく、其愚や及びがたきものである。人間は人間で澤山だ。強ひて神になる必要は無い、又禽獸になる必要も無い。人間は神の子だと云ふ前提は已に間違つて居るんだ。また其神の子がForbidden fruitを味つたが爲めに罪の子であると云ふ前提も間違つてゐるんだ。此に如何なる斷案を下したつて駄目だ。人間に肉的方面があるからつて罪の子だとは云へない。又靈的方面があるからつて神の子だとも云へない。人間は人間の子に過ぎない。其人間の子が人間として活動すればこそ意義あり、內實あり、交渉あり、生命ある人生も存するのだ。吾輩は茲に宣言する「吾は人間也 人間の本領を發揮すれば足る」と。

俗惡なる歌謠

社會一班の趣味の低落は近時流行の猥謠に見る事ができる。如何に社會の活動が激甚になりたればとて余り餘裕が無き過ぎるでは無いか。歌詞歌曲の淺薄卑俗なる殆んど三弦に上す價値の無いものである。如斯はむしろ明治の俗曲史に記載するだに恥しきものである。もし此分で行つたならば遠からずして從來の端唄趣味都々一趣味は日本固有の三味線趣味と共に湮滅に歸して仕舞ふかもしれない。情無い次第だ。

萬葉と俗謠

萬葉の價値を問ふものが多い。我は之に答へて萬葉の文藝的價値は其俗曲的價値よりも遙かに少いと云ひたい。萬葉二十卷を當時の俗曲として見れば其間に言ふ可からざる面白味がある生命がある。活躍がある。其質朴勇健僞らず飾らざる所はまア高遠なる俗謠か。

動中

「遠羅天釜」を繙く。此處には又會心の文字在り。「靜中を捨て嫌つて故意に動處を求め玉へと云ふにはあらず、只動靜二境を覺えず知らぬ程工夫純一なるを貴とす所以に言ふ眞正參禪の衲子は行て行事を知らず、座して座するを知らずと、中に就て眞實自性の淵源に轍底して一切所に於て受用する底の氣力を得んとならば動中の工夫に越ねたる事は侍るべからず」

行く者は歸るを思ふ

行く者は歸るを思ふ、歸るを思ふから人は行く。人は已に未練の者である。其間に幾多矛盾がある　衝突がある、悲しみがある、苦痛がある、寂しみがある、不滿足がある、過ぎ去りしを思ふはまたなき苦痛である。古を戀ふるは悲しみに生くる者である。野に立ちて落日の光を逐ひ限なき哀みに泣く田夫野人は落日の光の其日一日の生命の終なる事を悟るからである。一度去つてまた歸らぬと悟つた時人は身も世もあらずなる。

增泉村

增泉村は金澤の近郊にある田舍だ。戶數二三十戶の一村落だ。今年の三月二十八日に初つて此村を尋ねた——しかも遇然に尋ねた。丁度それは入日の時であつた。自分は此時の增泉村の入日の光景に全く肝玉をひしがれた。たゝ無性に愉快に有難くてならなかつた。それから殆んど毎日のやうに行つた。雨ふり揚りで大きな傘をさして行つた事もある。入日を田の面に沈めてウィスキーの壜を横へたやうな夕の空を後にして疲れて歸つたものだ。或時は友人を誘つてまで行つた事がある。三月二十八日、二十九日、四月十七日の日記は最もよく此時の感想を傳へて居るが拔萃するも憶苦だ。兎に角忘れ難い處である。恐らくは一生涯忘れ難い處であらう。

疲勞

平凡なる生活に厭き果てた時、厭き果てたと

云ふよりは寧ろ疲れ果てた時、身體の措所にさへ苦む時、身體が邪魔になつて仕樣の無い時、人は大なる疲勞を感ずる。疲勞した者には反抗も奮發も駄目だ。反抗するにも反抗の仕樣がない。强ひて反抗した所で得る所のものは矢張り疲勞だ。勝利、勝利、勝利とは果して何んだ、人はよく勝利、勝利と云ふけれども勝利に依りてうる所のものは果して何だらう。彼等の所謂勝利なるものは決して反抗と奮鬪との最終の結果では無い、最終の歸着では無い、最終の地位では無い。勝利に伴ふ大なる疲勞こそ奮鬪と反抗との最終の結果である、歸着である、地位である。世の中には疲勞は愚か勝利も敗北もしないで中プラリンに首をぶら下げて是は最大の勝利だなどゝ心得て居る馬鹿がある。彼等は實に幸福なものだ。要する反抗と苦鬪とは拘束の範圍内を脱するを得ずして轉々反側し、勝たんとして未だ勝たず疲勞せざる時の一擧手一投足なのだ。疲勞した者には反抗も苦鬪も全く無意義だ。

紅葉もえらい

紅葉もえらい。實にえらい男だ。「多情多恨」や「金色夜叉」を書いた紅葉はちつともえらくは無いが、かの晩年の「病骨錄」を書いた紅葉は實にえらいものだ。梁川よりも、兆民よりも、子規よりも、綠雨よりもづんとえらい。僅か三十余年の生涯ではあるが、彼が一生の本領と面目とは實に此渺たる一冊子に遺憾なくあらはされてゐる。今更紅葉をかつぎ出すのも乙なもんだが自分の「病骨錄」を讀んだのは此頃だから仕方がない。

附錄

純粹經驗と思惟及意思

教授　西田幾多郎

一、純粹經驗

經驗するといふのは事實其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てゝ、事實に從ふて知るのである。純粹といふのは、普通に經驗といつて居る者も、其實は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別も加へない、眞に經驗其儘の狀態をいふのである。例へば、色を見、音を聞く刹那、未だ之が外物の作用であるとか、我が之を感じて居るとかいふやうな考のないのみならず、此色、此音は何であるといふ判斷すら加はらない前をいふのである。それで、純粹經驗は直接經驗と同一である。自己の意識狀態を直下に經驗した時、未だ主もなく客もない、知識と其對象とが全く合一して居る。これが經驗の最醇なる者である。勿論、普通には經驗といふ語の意義が明に定つて居らず、ウントの如きは經驗に本づいて推理せられたる知識をも間接經驗と名け物理學、化學などを間接經驗の學と稱して居る。併し此等の知識は正當の意味に於て經驗といふことができぬばかりではなく、意識現象であつても、他人の意識は自己に經驗ができず、自己の意識であつても、過去に就いての想起、現在であつても、之を判斷した時は已に純粹の經驗ではな

い。眞の純粹經驗は何等の意味もない、事實其儘の現在意識あるのみである。

右にいつたやうな意味に於て、いかなる精神現象が純粹經驗の事實であらうか。感覺や知覺が之に屬することは誰も異論はあるまい。併し余は凡ての精神現象が此形に於て現はれるのであると信ずる。記憶に於ても、過去の意識が直に起てくるのでもなく、從つて過去を直覺するのでもない。過去と感ずるのも現在の感情である。抽象的概念であつても決して超經驗的の者ではなく、やはり一種の現在意識である。幾何學者が一個の三角を想像しながら、之を以て凡ての三角の代表となす樣に、概念の代表的要素なる者も現前に於ては一種の感情にすぎないのである。その外所謂意識の緣暈なる者を直接經驗の事實の中に入れて見ると、經驗的事實間に於ける種々の關係の意識すらも、感覺、知覺と同しく皆此の中に入つてくるのである。然らば、情意の現象はいかんといふに、快、不快の感情が現在意識であることはいふまでもなく、意思に於ても、其目的は未來にあるにせよ、我々はいつも之を現在の欲望として感するのである。

扨、斯く我々に直接であつて、凡ての精神現象の原形である純粹經驗とはいかなる者であらうか。之より少しくその性質を考へて見やう。先づ純粹經驗は單純であるか、將た複雜であるかの問題が起つてくる。直下の純粹經驗であつても之が過去の經驗の構成せられた者であるとか、又後にて之を單一なる要素に分析ができるとかいふ点より見れば、複雜といつてもよからう。併し純粹經驗はいかに複雜であつても、その瞬間に於ては、いつも單純なる一事實である。たとひ過去の意識の再現であつても、現在の意識中に統一せられ、之が一要素となつて、新なる意味を得

た時には、已に過去の意識と同一とはいはれぬ。之と同じく、現在の意識を分析した時にも、その分析せられた者はもはや現在の意識と同一ではない。純粹經驗の上から見れば、凡てが種別的であつて、其場合毎に、單純で、獨創的であるのである。次にかゝる純粹經驗の總合は何處まで及ぶか。純粹經驗の現在は、現在に就いて考ふる時、已に現在にあらずといふやうな思想上の現在ではない。意識上の事實としての現在には、いくらかの時間的繼續がなければならぬ。卽ち意識の焦点がいつでも現在となるのである。それで、純粹經驗の範圍は自ら注意の範圍と一致してくる。併し余は此の範圍は必ずしも注意の下にかぎらぬと思ふ。我々は少しの思想も交へず、主客未分の狀態にて注意を轉して行くことができるのである。例へば一生懸命に斷岸を攀る場合の如き、音樂家が熟錬した曲を奏する時の如き、全く知覺の連續といつてよい。又動物の本能的動作にも必ずかくの如き精神狀態が伴ふて居るのであらう。此等の精神現象に於ては、知覺が嚴密なる統一と連結とを保ち、意識が一より他に轉するも、注意は始終物に向けられ、前の作用が自ら後者を惹起し、其間に思惟を入るべき少しの龜裂もない。之を瞬間的知覺と比較するに、注意の推移、時間の長短こそあれ、その直接にして主客合一の点に於ては、少しの差異もないのである。特に所謂瞬間的知覺なる者も、其實は複雜なる經驗の結合構成せられたる者であるとすれば、右二者の區別は性質の差ではなくして、單に程度の差であるといはねばならぬ。純粹經驗は必ずしも單一なる感覺とはかぎらぬ。心理學者のいふやうな嚴密なる意味の單一感覺とは學問上分析の結果として假想した者であつて、反つて事實上に直接なる具体的經驗ではないので

ある。

純粹經驗の直接にして純粹なる所以は、單一であつて、分析ができぬとか、瞬間的であるとかいふにあるのではない。反つて具体的意識の嚴密なる統一にあるのである。意識は決して心理學者の所謂單一なる精神的要素の結合より成つたものではない、元來一の体系を成したものである。初生兒の意識の如きは明暗の別すら、さだかならざる混沌たる統一であらう。此の中より多樣なる種々の意識狀態が分化發展し來るのである。併しいかに精細に分化しても、何處までもその根本的なる体系の形を失ふとはない。我々に直接なる具体的意識はいつでも此形に於て現はれるのである。瞬間的知覺の如き者でも決して此形に背くことはない、例へば一目して物の全体を知覺すると思ふ場合でも、仔細に研究すれば、眼の運動と共に注意は自ら推移して、その全体を知るに至るのである。かく意識の本來は体系的發展であつて、この統一が嚴密で、意識が自ら發展する間は、我々は純粹經驗の立脚地を失はぬのである。此点は知覺的經驗に於ても、表象的經驗に於ても同一である。表象の体系が自ら發展する時は、全体が直に純粹經驗である。ゲーテが夢の中で、直覺的に、詩を作つたといふ如きは、その一例である。或は知覺的經驗では、注意が外物から支配せられるので意識の統一とはいへないやうに思はれるかも知れない。併し、知覺的活動の背後にもやはり或無意識統一力が働いて居なければならぬ、注意は之に由りて導かれるのである。又之に反し、表象的經驗はいかに統一せられてあつても、必ず主觀的所作に屬し、純粹の經驗とはいはれぬやうにも見える。併し表象的經驗であつても、その統一が必然で、自ら結合する時には我々は之を純粹の經驗と見なければならぬ。幾何學の公理の如き者は之に屬する。又夢に於てのやうに、外より統一を破る者がない時には、全く知覺的經驗と混同せられるのである。元來經驗に內外の別あるのではない、之をして純粹ならしむる者はその統一にあつて種類にあるのではない。表象であつても感覺と嚴密に結合して居る時には直に一つの經驗である。唯之が現在の統一を離れて他の意識と關係する時、もはや現在の經驗ではなくして、意味となるのである。又表象だけであつた時には、夢に於てのやうに、全く知覺と混同せられるのである。感覺がいつでも經驗であるのはその注意の焦点となり統一の中心となるが爲であらう。

今尙少しく精細に意識統一の意義を定め、純粹經驗の性質を明にせうと思ふ。意識の体系といふのは凡ての有機物のやうに、統一的或者が秩序的に分化展發し、その全体を實現するのである。意識に於ては、先づその一端が現はれると共に、統一作用は傾向の感情として之に伴ふて居る。我々の注意を指導する者は此の作用であつて、統一が嚴密であるか或は他より妨げられぬ時には、此の作用は無意識であるが、然らざる時には、別に表象となつて意識上に現はれ來り、直に純粹經驗の狀態を離れるやうになるのである。卽ち統一作用が働いて居る間は、全体が現實であり、純粹經驗である。而して意識は凡て衝動的であつて、主意說のいふ樣に、意思が意識の根本的形式であるといひ得るならば、意識發展の形式は卽ち廣義に於て意思發展の形式であり、その統一的傾向とは意思の目的であるといはねばならぬ。純粹經驗とは意思の要求と實現との間に少しの間隙もなく、その最も自由にして、活潑なる狀態である。勿論撰擇的意思より見ればかくの如き

衝動的意思に由りて支配せられるのは、反つて意思の束縛であるかも知れぬが、撰擇的意思とは、已に意思が自由を失つた狀態である。故に之が訓鍊せられた時には又衝動的となるのである。意思の本質は未來に對する欲求の狀態にあるのではなく、現在に於ける現在的の活動にあるのである。元來意思に伴ふ動作は意思の要素ではない。純心理的に見れば、意思は內面に於ける意識統覺作用である、而して此の統一作用を離れて別に意思なる特種の現象あるのではない、此の統一作用の頂点が意思である。思惟も意思と同しく一種の統覺作用であるが、その統一は單に主觀的である。然るに意思は主客の統一である。意思がいつも現在であるのも之が爲であらう。

純粹經驗は事實の直覺その儘であつて、意味がないといはれて居る。かくいへば、純粹經驗とは何だか混沌無差別の狀態であるかの樣に思はれるかも知れぬが、種々の意味とか判斷とかいふものは經驗の差別より起るので、後者は前者に由りて與へられるのではない、經驗は自ら差別相を具へた者でなければならぬ。例へは、一の色を見て之を青と判定したところが、元色覺が之に由りて分明になるのではない、唯之と同樣なる從來の感覺との關係をつけたまでゝある。又今余が視覺として現はれたる一經驗を指して机となし、之に就いて種々の判斷を下すも、之に由りて此の經驗其者の內容に何等の豊富をも加へないのである。要するに、經驗の意味とか判斷とかいふのは他との關係を示すにすぎぬので、經驗其者の內容を豊富にするのではない。意味或は判斷の中に現はれたる者は原經驗の一部であつて、反つて之よりも貧なる者である。勿論原經驗を想起した塲合に、前に無意識であつた者が後に意識せられるやうなこともあるが。こは前に注意せざりし部分に注意したまでゞあつて、意味や判斷を加へたのではない。

純粹經驗はかく自ら差別相を具へた者とすれば之に加へられる意味或は判斷といふのはいかなる者であらうか、又之と純粹經驗との關係はいかん。普通では、純粹經驗が客觀的實在に結合せられる時、意味を生し、判斷の形をなすといふ。併し純粹經驗の立脚地より見れば、我々は純粹經驗の範圍外に出ることはできぬ、意味とか判斷とかを生するのも、つまり現在の意識を過去の意識に結合するより起るのである、卽之を大なる意識系統の中に統一する統覺作用に本づくのである。意味とか判斷とかいふのは現在意識と他との關係を示す者で、卽意識系統の中に於ける現在意識の位置を顯はすにすぎない。例へは或聽覺について之を鐘聲と判した時は、唯過去の經驗中に於て之が位置を定めたのである。それで、いかなる意識があつても、そが嚴密なる統一の狀態にある間は、いつでも純粹經驗である、卽ち單に事實である。之に反しこの統一が破れた時、卽ち他との關係に入つた時、意味を生じ、判斷を生ずるのである。我々に直接に現はれ來る純粹經驗に對し、すぐ過去の意識が働いてくるので、之が現在意識の一部と結合し、一部と衝突し、此處に純粹經驗の狀態が分析せられ、破壞せられるやうになる。意味とか判斷とかいふものはこの不統一の狀態である。併しこの統一、不統一といふことも、よく考へて見ると、畢竟程度の差である、全然統一せる意識もなければ全然不統一なる意識もなからう。凡ての意識は体系的發展である、瞬間的知覺であつても種々の對立、變化を含蓄して居る樣に、意味とか判斷とかいふ如き關係の意識の背後には、此の關係を成立せしむる統一的意識がなければならぬ。ウントのいつた

様に、凡ての判斷は複雜なる表象の分析に由りて起るのである。又判斷が漸々に訓練せられ、その統一が嚴密となつた時には全く純粹經驗の形となるのである。例へば技藝を習ふ場合に、始は意識的であつた事も之に熟するに從つて、全く無意識となるのである。更に一歩を進んで考へて見れば、純粹經驗とその意味又は判斷とは意識の兩面を現はす者である、即ち同一物の見方の相違にすぎない。意識は一面に於て統一性を有すると共に、又一方には分化發展の方面がなければならぬ。而もゼームスが意識の流に於て說明したやうに、意識はその現はれたる處につきて居るのではなく含蓄的に他と關係をもつて居る。現在はいつでも大なる体系の一部と見ることができる。所謂分化發展なる者は更に大なる統一の作用である。

かく意味といふ者も大なる統一の作用であるとすれば、純粹經驗はかゝる場合に於て自己を超越するのであらうか。例へば思惟に於て過去と關係し、意思に於て未來と關係する時、純粹經驗は現在を超越すると考へることができるか。心理學者では意識は物でなく事件である、されば時々刻々に新なるので、同一の意識が再生することはないといふ。併し余はかゝる考は純粹經驗の立脚地より見たのではなく、反つて過去は再び還らず、未來は未だ來らずといふ時間の性質より推理したのではないかと思ふ。純粹經驗の立脚地より見れば、同一内容の意識は同一の意識とせねばなるまい。例へば思惟或は意思に於て、一つの統一的目的表象が連續的に働く時、之を一つの者と見なければならぬ樣に、その統一作用が時間上には斷續して居ても、同樣に考へねばならぬと思ふ。

二、思惟

思惟といふのは心理學から見れば、表象間の關係を定め、之を統一する作用である。その最も單一なる形は、判斷であつて、即ち二つの表象の關係を定め、之を結合するのである。併し我々は判斷に於て二つの獨立なる表象を結合するのではなく、反つて或一つの全き表象を分析するのである。例へば馬が走るといふ判斷は、走る馬といふ一表象を分析して生ずるのである。それで、判斷の背後にはいつでも純粹經驗の事實がある。判斷に於て主客兩表象の結合は、實に之に由りてできるのである。勿論いつでも全き表象が先づ現れて、之より分析が始まるといふのではない。先づ主語表象があつて、之より一定の方向に於て種々の聯想を起し、撰擇の後其一に決定する場合もある。併しこの場合でも、愈之を決定する時には、先づ主客兩表象を含む全き表象が現れねばならぬ。つまり此の表象が始から含蓄的に働いて居たのが現實となる所に於て判斷を得るのである。かく判斷の本は純粹經驗がなければならぬといふことは、啻に事實に對する判斷の場合のみではなく、純理的判斷といふやうな者に於ても同樣である。例へば幾何學の公理の如き者でも皆一種の直覺に本づいて居る。たとひ抽象的概念であつても二つの者を比較し判斷するには其本に於て統一的或者の經驗がなければならぬ。所謂思惟の必然性といふのは之より出てくるのである。故に若し知覺の如き者のみでなく、關係の意識をも經驗と名つくることができるならば、純理的判斷の本にも純粹經驗の事實があるといふことができるのである。又推論の結果として生ず

る判斷に就いて見ても、ロックが論證的知識に於ても一歩々々に直覺的證明がなければならぬといつた樣に、連鎖となる各判斷の本にはいつも純粹經驗の事實がなければならぬ。種々の方面の判斷を總合して斷案を下す場合に於ても、たとひ全体を統一する事實的直覺はないにしても、凡ての關係を綜合統一する論理的の直覺が働いて居るのである。例へば、種々の觀察より推して、地球が動いて居なければならぬといふのも、つまり一種の直覺に本づける論理法に由りて判斷するのである。

從來傳說的に思惟と純粹經驗とは全く類を異にせる精神作用であると考へられて居る。併し今凡ての獨斷を棄てゝ直接に考へ、ゼームスが純粹經驗の世界と題せる小論文にいつた樣に、關係の意識をも經驗の中に入れて見ると、思惟の作用も純粹經驗の一種であるといふことができると思ふ。知覺と思惟の要素たる心像とは、外より見れば、一は外物に因りて末端神經の刺戟に本づき、一は腦の皮質の刺戟に本づくといふ樣に區別ができ、又內から見ても、我々は通常知覺と心像とを混同することはない。併し純心理的に考へて、何處までも嚴密に區別ができるかといふに、それは頗る困難である。つまり强度の差とか種々の關係とかいふ外に絕對的區別はないのである。原始的意識にかゝる區別があつたのではなく、唯種々の關係より區別せられる樣になつたのであらう。又一見、知覺は單一であつて、思惟は複雜なる過程である樣であるが、知覺といつても必ずしも單一ではない、知覺も構成的作用である。思惟といつてもその統一の方面より見れば一の作用である。或統一的一者の發展と見ることができる。

かく思惟と知覺的經驗の如き者とを同一種と考へることに就いては種々の異論があるであらうから、余は之より少しく此等の点に就いて論じて見やうと思ふ。普通には知覺的經驗の如きは所働的で其作用が凡て無意識であり、思惟は之に反し能働的で其作用が凡て意識的であると考へられて居る。併しかやうに明なる區別は何處にあるであらうか。思惟であつても、そが自由に活動し發展する時には、殆んど無意注意の下に於て行はれるのである。意識的となるのは反つて此の進行が妨げられた場合である。思惟を進行せしむる者は我々の隨意作用ではない。思惟は己自身にて發展するのである。我々が全く自己を棄てゝ思惟の對象卽ち問題に純一となつた時、更に適當にいへば自己をその中に沒した時、始めて思惟の活動を見るのである。思惟には自ら思惟の法則かある、我々の意思に從ふのではない。對象に純一になること、卽ち注意を向けるのを有意的といへば、いひうるであらうが、此点に於ては知覺も同一であらうと思ふ。勿論思惟に於ては知覺の場合よりも統一が寬であり、その推移が意識的であるやうに思はれるので、前に之を以てその特徵として置いたが、嚴密に考へて見ると此の區別も相對的であつて思惟に於ても一表象より一表象に推移する瞬間に於ては無意識である。統一作用が現實に働きつゝある間は、無意識でなければならぬ。之を對象として意識する時には、已にその作用は過去に屬するのである。かく思惟の統一作用は全然意思の外にあるのであるが、唯我々が或問題について考へる時、種々の方向があつてその取捨が自由である樣に思はれるのである。併しかゝる現象は知覺の場合にもないのでない、少しく複雜なる知覺に於てはいかに注意を向けるかは自由である。その外、知覺では我々

は外から動かされ、思惟では内より動くなどいふが、内外の區別といふも要するに相對的にすぎぬ。唯思惟の材料たる心像は比較的變動し易く自由であるから、かく見えるのである。

次に普通には知覺は具象的事實の意識であり、思惟は抽象的關係の意識であつて、兩者全然その類を異にする者の樣に考へられて居る。併し純粹に抽象的關係といふやうな者は我々は之を意識することはできぬ。思惟の運行も或具象的心像をかりて行はれるのである。心像なくして思惟は成立せない。例へは三角形の凡ての角の和は二直角であるといふことを證明するにも或特殊なる三角形の心像に由らねはならぬのである。それで思惟は心像を離れた獨立の意識ではない、之に伴ふ一現象である。ゴールといふ人は心像とその意味との關係は刺激とその反應との關係であると說いて居る。思惟は心像に對する意識の反應であつて、而して又心像は思惟の端緒である。思惟と心像とは別物ではない。いかなる心像であつても決して獨立ではない、必ず全意識と何等かの關係に於て現はれる。而して此の方面が思惟に於ける關係の意識である。純粹なる思惟と思はれる者も唯此の方面の著しき者にすぎないのである。さて心像と思惟との關係を右の如く考へた所で、知覺に於てはかくの如き思惟的方面がないかといふに決してさうではない。凡ての意識現象のやうに知覺も一の体系的作用である。知覺に於てはその反應は反つて顯著であつて意思となり動作となつて現はれるのであるが、心像に於ては單に思惟として內面的關係に止まるのである。されは意識には知覺と心像との區別はあるが具象と抽象との別はない而して知覺と心像との別も嚴密なる純粹經驗の立脚地よりしては何處までも區別することはできないのである。

以上は心理學上より見て、思惟も純粹經驗の一種であることを論したのであるが、思惟は單に個人的意識の上の事實ではなくして客觀的意味を持つて居る、思惟の本領とする所は眞理を現はすにあるのである。自分で自分の意識現象を直覺する純粹經驗の場合には眞妄といふことはないが、思惟には眞妄の別があるといへる。此等の点を明にするには所謂客觀、實在、眞理等の意義を詳論する必要はあるが、極めて批判的に考へて見ると、純粹經驗の事實の外に實在なく、此等の性質も心理的に說明ができると思ふ。前にもいつた樣に、意識の意味といふのは他との關係より生じてくる、換言すればその意識の入り込むる体系に由りて定まつてくる。同一の意識であつてもその入り込む体系の異なるに由りて種々の意味を生ずるのである。それでたとひ心像であつても他に關係なく唯それだけとして見た時には、何等の意味も持たない單に純粹經驗の事實である。之に反し知覺も意識体系の上に他と關係を有する点より見れは意味を持つて居る。唯その意味が無意識であるのである。然らはいかなる思想が眞でありいかなる思想が僞であるかと云ふに、我々はいつでも意識体系の中で最有力なる者、卽ち最大最深なる者を客觀的實在と信じて居り、之に合つた時眞理と考へ之と衝突した時僞と考へるのである。此考より見て、知覺にも正しいとか誤るとかいふことがある。卽ち或体系よりして見て、よくその目的に合ふた時が正しかつたので、之に反した時が誤つたのである。勿論此等の体系の中には種々の意味があるので、知覺の背後に於ける体系は多く實踐的であるが、思惟の者は純知識的であるといふやうな區別もできるであらう。併し余は知識の究竟的目的は實踐的であるやうに、意思の本に理性が潛んで居るといへると

思ふ。この事は後に意思の處に論ぜうと思ふが、かゝる体系の區別も絶對的とはいへないのである。又同し知識的作用であつても、聯想とか記臆とかいふのは單に個人的意識内の關係統一であるが、思惟だけは超個人的で一般的であるともいへる。併しかゝる區別も我々の經驗の範圍を強いて個人的とかぎるより起るので、純粹經驗の前には反て個人なる者のないことを考へぬのであると思ふ。

之まで思惟と純粹經驗とを比較し、普通には此の二者が全く類を異にすると思ふて居る点も、深く考へて見ると一致の点を見出し得ることを述べたのであるが、今少しく思惟の起源及歸趣について論じ、更に右二者の關係を明にせうと思ふ。我々の意識の原始的狀態、又は發達せる意識でもその直接の狀態はいつでも純粹經驗の狀態であることは誰も許す所であらう。反省的思惟の作用は第二位的に之より生した者である。然らば何故に此の如き作用が生ずるのであるかといふに、前にいつた樣に意識は元來一の体系である、自ら己を發展完成するのかその自然の狀態である、而もその發展の行路に於て種々なる体系の矛盾衝突が起つてくる、反省的思惟はこの場合に現はれるのである。併し一面より見ればかく矛盾衝突であるが、他面より見れば直に一層大なる体系的發展の端緒である、換言すれば大なる統一の未完の狀態ともいふべき者である。例へば行爲に於ても又知識に於ても、我々の經驗が複雜となり、種々の聯想が現はれ、その自然の行路が妨げた時我々は反省的となる。此の矛盾衝突の裏面には暗に統一の可能を意味して居るのであるが、決意或は解決の時已に大なる統一の端緒が成立するのである。併し我々は決してかくの如き内面的統一の狀態に止まるのではない、決意は之に實行の伴ふは言をまたず、思想でも必ず何等かの實踐的意味をもつて居る、思想は我々の最終の目的ではない、反つて推移の途中である。されば純粹經驗の事實は我々の思惟のアルファであり又オメガである。要するに思惟は大なる意識体系の發展實現する過程にすぎない、若し大なる意識統一に住して之を見れば、思惟といふのも大なる一直覺の上に於ける波瀾にすぎぬのである。例へば我々が或目的について苦慮する時、目的なる統一的意識はいつでもその背後に直覺的事實として働いて居るのである。それで思惟といつても別に純粹經驗とは異なつた内容も形式も持つて居らぬ、唯その深く大ではあるが唯未完の狀態である。他面より見れば、眞の純粹經驗は單に所働的でなく、構成的で、一般的方面を持つて居る、卽思惟を含んで居るといつてもよい。

純粹經驗と思惟とは元來同一事實の見方を異にした者である。嘗てヘーゲルが力を極めて主張したやうに、思惟の本質は抽象的なるにあるのでなく、反つてその具体的なるにあるとすれば、余が上にいつた意味の純粹經驗と殆んど同一となつてくる。純粹經驗は直に思惟であるといつてもよい。具体的思惟より見れば概念の一般性といふのは普通にいふ樣に類似の性質を抽象した者ではない、具体的事實の統一力である。ヘーゲルも一般とは具体的なる者の精神であるといつて居る。而して我々の純粹經驗は体系的發展であるから、その根底に働きつゝある統一力は直に概念の一般性其者でなければならぬ、經驗の發展は直に思惟の進行となる、卽ち純粹經驗の事實とは所謂一般なる者が己自身を實現するのである。感覺或は聯想の如き者に於てすら、その背後に卽

統一作用が働いて居る。之に反し思惟に於ても統一が働いて居る瞬間にはその統一自身は無意識である。唯統一が抽象せられ、對象化せられた時別の意識となつて現れる、併しこの時は已に統一の作用を失つて居るのである。純粹經驗とは單一とか所働的かといふ意味ならば思惟と相反するであらうが、經驗とはありのまゝを知るといふ意ならば此等の性質は反つて純粹經驗の狀態とはいはれない、眞に直接なる狀態は構成的で能働的である。

我々は普通に思惟に由りて一般的なる者を知り、經驗に由りて個体的なる者を知ると思ふて居る。併し個体を離れて一般的なる者があるのではない、眞に一般的なる者は個体的實現の背後に於ける潜勢力である。個体の中にありて之を發展せしむる力である。例へば植物の種子の如き者である。若し個体より抽象せられた他の特殊と對立する如き者ならば、そは眞の一般ではなくしてやはり特殊である。かゝる場合では一般は特殊の上に位するのではなく、之に同列にあるのである。例へは色ある三角形について三角形より見れば色は特殊であるであらうが、色より見れば三角は特殊である。かくの如き抽象的で無力なる一般ならば推理や綜合の本となることはできぬ。それで思惟の活動に於て統一の本たる眞に一般なる者は個体的現實とその內容を同ふする潜勢力でなければならぬ。唯その含蓄的なると顯現的なるとに由りて異なつて居るのである。個体は一般的なる者の限定せられたのである。個体と一般との關係をかくの如く考へると、論理的にも思惟と經驗との差別をなくすることができる。我々が現在の個体的經驗といつて居る者もその實は發展の途中にある者と見ることができる、卽尙精細に限定せらるべき潜勢力を持つて居るのである。

例へば我々の感覺の如き者でも尙發達の餘地があるでのあらう、此の点より見て尙一般的となすこともできる。之に反し一般的の者でも、發展をその處にかぎつて見れは、個体的といふこともできるであらう。普通には空間時間の上に於て限定せられた者をのみ個体的と稱へて居る。併しかゝる限定は單に外面的である。眞の個体とはその內容に於て個体的でなければならぬ、卽唯一の特色を具へた者でなければならぬ。一般的なる者が發展の極處に到つた處が個体である。此の意味より見れば、普通に感覺或は知覺といつて居るやうな者は極めて內容に乏しき一般的なものであつて、深き意味に滿ちたる畫家の直覺の如き者が反つて個体的といひうるであらう。凡て時間空間の上より限定せられた、單に物質的なる者を以て、個体的となすのはその根底に於て唯物論的獨斷があるであらうと思ふ。純粹經驗の立脚地より見れば、經驗を比較するにはその內容を以てすべき者である。時間空間といふ如き者もこの內容に本ついて、之を統一する形式にすぎないのである。或は又感覺的印象の强く明なることその情意と密接の關係をもつことなどが之を個体的と思はしめる一原因でもあらうが、所謂思想の如きも決して情意に關係がないのではない。强き情意を動かす者が特に個体的と考へられるのは、情意は知識に比して我々の目的其者であり、發展の極致に近いからであると思ふ。

之を要するに思惟と經驗とは同一であつて、その間に相對的の差異を見ることはできるが、絕對的區別はないと思ふ。併し余は之が爲に思惟は單に個人的主觀的であるといふのではない。前にもいつた樣に純粹經驗は個人の上に超越することができる。かくいへば甚だ異樣に聞えるであら

うが、經驗は時間、空間、個人を知るが故に時間、空間、個人以上である。個人あつて經驗あるのではなく、經驗あつて個人あるのである。個人的經驗とは經驗の中に於て限ぎられる一小範圍である、經驗の特殊なる一種にすぎない。

（以下次號）

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限る

一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載せず

明治四十一年六月十九日印刷
明治四十一年六月二十二日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會